〔2019 年度卒業論文〕

クロアチア独立国における ウスタシャ運動へのカトリック聖職者の支援

久　我　　玲

はじめに

本稿は、第二次大戦下で建国された「クロアチア独立国」[1)]におけるカトリック聖職者を対象とし、大戦間期に始まったクロアチア民族の極右政治組織であるウスタシャを主体とした運動、所謂ウスタシャ運動への彼らの支援を分析し、論じるものである。

まず、ウスタシャについて考察を加えた上で、カトリック聖職者によるウスタシャ運動への支援における論点を明確にしたい。

第一次大戦後、南スラヴ人諸地域を国土に含める多民族国家、「第一のユーゴスラヴィア」が誕生した[2)]。セルビア民族中心の統治体制だったユーゴ王国では、もう一方の主要構成民族であるクロアチア民族のナショナリズムが次第に顕在化していった。そうした民族問題によって、ユーゴ王国の国家体制が揺らぐ渦中の 1930 年、ウスタシャは結成される。同組織の最大の政治目標はク

1）枢軸国陣営の傀儡国家であった「クロアチア独立国」は通常の独立国家のような統治体制は存在しなかったことから、本邦の研究では括弧付けで表記されるのが一般的である。しかし、本稿では聖職者の支援の分析にあたり、統治体制の実態を考慮するため、以下の本論では一貫して「　」を外した状態で記すことにする。

2）1918 年に誕生した「セルビア人・クロアチア人・スロヴェニア人王国」は、第二次大戦後の社会主義ユーゴスラヴィアと区別して「第一のユーゴスラヴィア」とも呼ばれる。大戦間期に存続した同国は、1929 年の国王独裁制の開始に伴い「ユーゴスラヴィア王国」に改称された。以下の本稿では、「第一のユーゴスラヴィア」を「ユーゴ王国」と記すことにする。

ロアチア民族の独立国家を建設することにあった。枢軸国陣営によるユーゴ王国の占領及び崩壊後、1941 年 4 月に傀儡国家としてクロアチア独立国が建設され、ウスタシャが政権を担うことになる。ウスタシャ政権下では、セルビア民族、ユダヤ人やロマ、あるいは共産主義者などに対して排外主義に基づく政策が実行された。大量虐殺はその一環であり、しばしばウスタシャの残虐性を象徴する代表的なものとしてヤセノヴァツ強制収容所が挙げられる。以上のように大戦間期からクロアチア独立国期にかけて行われたウスタシャによる一連の活動がウスタシャ運動である。

そうした中で、カトリック教会が如何にウスタシャ政権に協力したかについては、長らく議論の対象とされてきた。しばしば焦点となるのが、当時クロアチア・カトリック教会の指導者であったザグレブ大司教ステピナツを巡る評価であり、戦時中のウスタシャへの支援と、戦後の社会主義政権による弾圧という両端の狭間でせめぎ合いが続いている[3)]。その他にもウスタシャ政権によるセルビア民族への強制改宗に対する教会側の立場、聖職者のウスタシャ支援の背景にバチカンの後ろ盾があったのかについてなど、いくつかの論点が存在する。こうした戦時期のカトリック教会とウスタシャの関係を巡っては、今もなおクロアチア社会内部で対立を孕む問題であり続けている[4)]。社会主義ユーゴ

3）ステピナツの評価を巡っては、クロアチア・カトリック教会とセルビア正教会の間で今も検証・論争が続いている。また、現在クロアチアの義務教育段階で使用される歴史教科書には、ウスタシャを非難したといった記述やウスタシャ政権の最大の敵対者であったなどと、ステピナツを肯定的に捉える記述が多く見られる。山川卓『マイノリティ保護のクロアチア政治史』晃洋書房、2019 年、64 頁。石田信一「旧ユーゴスラヴィア諸国と第二次世界大戦をめぐる歴史認識」『地域研究』12 号、2012 年、255 頁。

4）クロアチアにおける歴史と記憶を巡る問題でしばしば引き合いに出されるのが、一つはヤセノヴァツ強制収容所であり、もう一つは、パルチザンが降伏した兵士や民間人を殺害した「ブライブルクの悲劇」である。犠牲者の数を巡る論争に加えて、カトリック教会による追悼式典への参加が内外で問題になってきた。これまでクロアチアの司教たちは、ヤセノヴァツ強制収容所での式典への参加には消極的だった一方で、クロアチア人を犠牲者として位置づけるブライブルクでの追悼式典には一部の司教が進んで参加してきたことから、その都度、戦時期におけるカトリック教会の役割を巡る論争が起きている。Pål Kolstø, “The Croatian Catholic Church and the long road to Jasenovac,” *Nordic journal of Religion and Society,* 24(1), 2011, pp.37-56.

スラヴィア時代の研究では、教会側が積極的にウスタシャ政権に与したとして「教権主義」の典型例とされることが多かった[5)]。そのため、聖職者の動向を一枚岩的に捉える傾向が強かったと言える。一方、近年ではイデオロギー的制約から距離を取った研究が蓄積されている[6)]。M・ビオンディチは、大戦間期のカトリック教会はウスタシャ運動とは当初大きく異なる政治的主張をしていたこと、大戦間期に急進化していく過程でウスタシャと連携する聖職者グループが現れたことを指摘している。また、ナショナリズムがカトリック教会に与えてきた影響を強調した上で、戦時期の急進的な聖職者がウスタシャを支援したと結論付けている[7)]。とはいえ、各々の聖職者が如何なる形でウスタシャ政権に関与したか。その「主体性」については具体的かつ詳細に分析されてきたとは十分には言えない。そこで本稿では、上記の先行研究を踏まえつつ、クロ

5）代表的なものとして、1948 年にザグレブで出版された V・ノヴァクによる『マグナム・クリメン』が挙げられる。ノヴァクは同書の中で、大戦間期の教権主義の動向を踏まえた上で、バチカンを後ろ盾としたカトリック教会がウスタシャ政権を支援し、大量虐殺や強制改宗に加担したことを非難している。興味深いのは、バチカンが出版直後に発禁処分にした一方で、86 年にベオグラードで再版されたことである。また同様に、社会主義ユーゴスラヴィア史学を代表するものとして V・ディディエルの著作がある。87 年にセルビア語で初版が出てから、その後、続けざまにドイツ語と英語の翻訳が出版された。どちらの本もイデオロギー的側面はあるが、当時の時代背景を知る上で有益であるため、本稿では適宜参照する。Viktor Novak, (trans. Ileana Ćosić, Milica Borlja), *Magnum Crimen : half a century of clericalism in Croatia : dedicated to the known and unkown victims of clericalism,* Jagodina : Gambit, 2011. ; Vladimir Dedijer, (trans. Harvey L. Kendall), *The Yugoslav Auschwitz and the Vatican : The Croatian Massacre of the Serbs during World War II,* Buffalo : Prometheus Books, Freiburg : Ahriman-Verlag, 1992.

6）他方で、社会主義ユーゴの崩壊後、クロアチア、セルビア両国で新たな「国民史」を描くにあたり、歴史の見直しが強化された結果、ウスタシャ運動の研究が不可欠になっていることも指摘しておかなければならない。これは、犠牲者意識と「回顧的正義 retrospective justice」との問題が密接に関わっていることに因るものである。Constantin Iordachi, "Fascism in Southern Europe : A Comparison between Romania's Legion of the Archangel Michael and Croatia's Ustaša." in Roumen Daskalov and Diana Mishkova, eds., *Entangled Histories of the Balkans, Volume Two : Transfers of Political Ideologies and Institutions,* Leiden, Boston : Brill, 2014, p.386.

7）Mark Biondich, "Controversies surrounding the Catholic Church in Wartime Croatia, 1941-45," *Totalitarian Movements and Political Religions,* 7(4), 2006, pp.383-399.

アチア独立国におけるウスタシャ運動に関与した聖職者の言動の分析を通して、聖職者がどのような背景で運動を支援し、如何なる対応を取ったのかについて明らかにしたい。

以下、次章以降の内容を示す。第 1 章では議論の前提としてクロアチア・ナショナリズムの展開とカトリック教会の役割について説明する。その上で大戦間期の聖職者の動向とクロアチア独立国を担うことになるウスタシャの創設の経緯を振り返り、ユーゴ王国期における教会勢力の急進化を説明する。次に第 2 章では戦時期の聖職者たちの動向を追い、どのような背景の下で排外主義的政策に関与したかについて考察する。また第 3 章ではクロアチア独立国へのバチカンの対応に注目し、その対応がクロアチアのカトリック聖職者にもたらした影響について見ていきたい。最後にまとめとして本稿の分析の結果と展望を記す。

第 1 章　カトリック教会とクロアチア・ナショナリズム

大戦間期のカトリック教会の立場及び聖職者の動向を追うことは、ウスタシャへの支援の背景を探る際に欠かせない。実際、一部教会勢力とウスタシャ運動との合流にはナショナリズムが重要な役割を果たすことになる。そこで本章では、カトリック教会を取り巻くクロアチア・ナショナリズムの変遷を概観した上で、ユーゴ王国期においてウスタシャ運動とカトリック教会が交差する経緯について確認する。

1.1　19 世紀クロアチア・ナショナリズムとカトリック教会

近代クロアチア・ナショナリズムは、ハプスブルク帝国期にあたる 1830 年代から 40 年代にかけてクロアチア民族再生を動因として展開された文化的・政治的運動であるイリリア運動に端を発する。イリリア運動は当初リュデヴィト・ガイを中心とした文芸運動として開始された。41 年にはクロアチア議会の政党としてイリリア党（43 年に民族党に改称）が結成され、次第にハンガ

リーの同化政策に対抗する政治運動としての性格を強めていくことになる。その過程で、ハプスブルク帝国下の南スラヴ民族の連帯を唱えながら、同時にクロアチア＝スラヴォニア及びダルマチア[8]の政治的統一を目指すようになった[9]。

1860 年代に入るとイリリア主義を継承する形で二つの潮流が確立していくことになる。一つはハプスブルク帝国下で南スラヴ民族の連帯に依拠して、政治的向上を図る「ユーゴスラヴィア主義」である。これはカトリック聖職者であるヨシプ・ユライ・シュトロスマイエルとフラニョ・ラチュキを中心に展開された。ジャコボ司教で民族党の党首でもあったシュトロスマイエルはハプスブルク帝国内で連邦制を導入して、南スラヴ民族の自治拡大を主張した。一方で、彼はクロアチア民族にのみ自らの「歴史的領土」[10]を統治する「政治的民族」としての権利を認めていた[11]。シュトロスマイエルが説く「ユーゴスラヴィア主義」の背景には、クロアチア民族をキリスト教世界の保護者として認識し、そしてオスマン帝国支配下の南スラヴ人諸地域をカトリック教徒と正教徒が協力して解放した上で、新しい国家を構築しハプスブルク帝国から自立できるとの考えがあった[12]。もう一つは、クロアチア・ナショナリズムに傾倒する「権利主義」である。その代表的イデオローグであるアンテ・スタルチェヴィ

8）クロアチア・ナショナリズムを考える際、国民形成の発展における地域的差異を念頭に置く必要がある。特にダルマチアは歴史的にクロアチアとしての地域的一体性を共有しておらず、イタリア系とスラヴ系が混住してきた地域であった。19 世紀のナショナリズム運動と当時の国際政治上の大きな動向の中で、国民理念の選択が迫られ、ダルマチアの住民は 1870 年代には「クロアチア人」、「セルビア人」、「イタリア人」に分化していった。石田信一『ダルマチアにおける国民統合過程の研究』刀水書房、2004 年、23-29 頁。

9）門間卓也「ウスタシャ運動と「知識人」のナショナリズム－クロアチア独立国の民族統治を巡る「主体性」－」博士論文、東京大学大学院、2019 年、28-29 頁。

10）かつてクロアチア中世王国が治めたとされるクロアチア＝スラヴォニアとダルマチア地域の一部をここでは、「歴史的領土」と指す。しかし後述するように、権利主義はボスニア・ヘルツェゴヴィナ地域をも含む民族国家樹立を主張の根幹に据えていた。

11）門間卓也、前掲論文、30 頁。

12）山川卓、前掲書、50 頁。

チは民族国家樹立を掲げて創設した権利党の下で、「権利主義」と呼ばれる民族主義的イデオロギーを展開していった。「権利主義」はクロアチア民族の「歴史的領土」をボスニア・ヘルツェゴヴィナ地域とドリナ川沿いまで含むものとし、またセルビア民族の「政治的民族」としての権利は否定し、同民族を正教徒のクロアチア民族と見做すものであった。以上のように、19 世紀クロアチア・ナショナリズムは、クロアチア民族の統合と南スラヴ民族の糾合を呼びかける「ユーゴスラヴィア主義」の性質を備えながら展開していったと言える[13)]。

それでは、クロアチア民族のイデオローグにとって宗教の捉えられ方は如何なるものだったのか。事実、彼らは宗教をナショナリズムにおける重要な要素と見做しておらず、民族を定義する際の基準として採用しなかった[14)]。シュトロスマイエルは、民族を定義する上で、宗教は危険で不安定なものとして捉えており、クロアチア民族とセルビア民族の間における宗派分離は潜在的な障害であると考えていた。そのため彼は宗派間の和解に努めることとなる[15)]。さらにスタルチェヴィチにいたっては、「歴史的領土」に居住するカトリック教徒、正教徒そしてムスリムは、全てクロアチア民族と見做していた。

一方、ナショナリズムが展開される中で、クロアチアのカトリック聖職者及び知識人の民族観はどうだったか。そのことは、20 世紀の幕開けに始まった「クロアチア・カトリック運動」で確認される。19 世紀を通じて、カトリック教会はヨーロッパ各所でリベラリズム、宗教と国家の分離、個人主義そして教育の世俗化に直面していた[16)]。それに抗して、自らの教義の社会的浸透を目的

13）Tihomir Cipek, “The Croats and Yugoslavism,” in Dejan Djokić, ed., *Yugoslavism : Histories of a Failed Idea 1918-1992,* London : Hurst & Company, 2003, pp.71-72.

14）Mark Biondich, “Religion and Nation in Wartime Croatia : Reflections on the Ustaša Policy of Forced Religious Conversions”, 1941-1942, *The Slavonic and East European Review,* 83（1）, 2005, p.75.

15）Sabrina P. Ramet, *The Three Yugoslavias : State-Building and Legitimation, 1918-2005,* Washington, DC : Woodrow Wilson Center Press, 2006, p.39.

16）Biondich, “Controversies surrounding the Catholic Church,” p.432. 1891 年に教皇レオ 13 世は回勅「レールム・ノヴァールム」（ラテン語で「新しきもの」の意味。回勅とは教皇が信徒全体に与える書簡）を発した。これは、近代の社会情勢に対する↗

とするカトリック運動が開始されることになる。この頃、カトリック学生組織の結成や学生紙の創刊、学術協会の設立などが見られた。クロアチアではスロヴェニア人のクルク司教アントゥン・マフニッチを唱道者に、そしてボスニア・ヘルツェゴヴィナにおいてはサラエヴォ大司教ヨシプ・スタドレルを唱道者として展開された。しかし、イタリア、フランスそしてオーストリアのようなカトリック社会とは異なり、多様な民族、宗教を抱えていたクロアチアやボスニア・ヘルツェゴヴィナでは民族意識の問題で分裂することになった。1900年にザグレブで開催された最初のクロアチア・カトリック会議では、カトリックをクロアチア民族のアイデンティティの指標に置く民族観が紹介された[17)]。ヨシプ・スタドレルはクロアチアの民族性とカトリシズムを結びつけようとし、ボスニア地域のムスリムをカトリックに改宗させようと願い、さらにはカトリック系クロアチア民族とスロヴェニア民族をハイブリッドな南スラヴ民族という土台に組み込もうとした。このようなスタドレルの見解は、一部のクロアチア民族、スロヴェニア民族の教権主義者に共通していた。

しかしながら、多くのカトリック知識人と聖職者はカトリシズムとクロアチア・ナショナリティを同一視することに反対し続けた。第二回クロアチア・カトリック会議が1913年にリュブリャナで開かれた際、東方典礼カトリック教会の代表者ヤンコ・シムラクは信仰と民族性を同一視することに反対し、他の代表者にも促した。彼は「クロアチアの土地にいる正教徒がセルビア民族と見なされ、唯一カトリック教徒だけがクロアチア民族と見做されるのは大きな誤りだ」と述べている[18)]。

以上概観してきたように、19世紀クロアチア・ナショナリズムの展開の中で、クロアチア・カトリック教会も民族意識の問題に直面することになった。そこでは、スタドラーのように信仰と民族性を融合する者もいれば、一方で多

↘ 積極的な発言の嚆矢とされている。工業化や資本主義の弊害について警告し、労働者の権利と尊厳を訴えた。松本佐保、『バチカン近現代史』中公新書、2013年、64-68頁。

17）Ibid., p.433.

18）Ibid., pp.432-433.

くの聖職者のように、クロアチア民族のナショナリティに宗教を組み込むことに反対する者もいた。このように、ハプスブルク帝国下における教会側のクロアチア人意識に関する姿勢は、必ずしも一致していなかったといえる。そして、時代は移り、第一次大戦後には「ユーゴスラヴィア主義」が建国の思想的基盤となった南スラヴ人の統一国家が建国される。しかし、その統治にはセルビア人に支配的な立場が与えられ、セルビア正教が実質的に国教として扱われた[19]。そうした状況から、戦間期にはクロアチア民族の地位を高めるための動きが活動的になっていく。続く第 2 節は、新国家ユーゴスラヴィアにおけるカトリック教会の動向を 1920 年代の議会政治期に焦点を当てて見ていきたい。

1.2　ユーゴ王国議会政治期におけるカトリック教会

第一次世界大戦が終結し、戦時末期にオーストリア＝ハンガリー帝国から独立宣言を行っていた南スラヴ民族諸地域と、既にオスマン帝国から独立していたセルビア王国が統合される形でユーゴ王国が建国された。「ユーゴスラヴィア主義」を掲げて成立した国家を、当初、聖職者たちは好意的に受け止めた。実際、ザグレブ大司教バウエル、ジャコボ司教アクシャモヴィチ、クルク司教マフニッチなどの教会指導者たちは新国家を歓迎した。バウエルは 1918 年 12 月と 1919 年の初めに聖職者に向けて新国家を歓迎する趣旨の回状を発出している。こうした教会指導者の新国家に対する当初の支持は、クロアチア知識人と中産階級の間で行き渡っていた「ユーゴスラヴィア主義」に基づく同国誕生の熱狂を反映していた。とはいえ、一部の聖職者にとってハプスブルク帝国の崩壊は嘆かれるものであり、サラエヴォ大司教イヴァン・シャリチのように新

19）国家の祝日はセルビア正教の暦に従い、ユーゴ王国軍の宣誓式にはセルビア正教の聖職者が列席した。またセルビア正教の高位聖職者を始めとする学校・軍・教会裁判所に関わる聖職者は全員、国家官吏として国家から俸給が与えられた。なおユーゴ王国の憲法では、宗教の完全な平等が謳われており、宗教の政治利用は禁止されていたものの、政教分離を明確に規定する条文はなかった。長島大輔,「国家と宗教－ユーゴスラヴィアの例（1918-1991）」『北海道スラブ研究センター公開講座』、2007 年、4-5 頁。URL : https://src-h.slav.hokudai.ac.jp/kokai/2007/nagashima.pdf【閲 覧確認日：2019 年 11 月 9 日】。

生国家ユーゴスラヴィアに対して共感をほとんど示さない者もいた[20)]。

ユーゴ王国は、セルビア系の政治家を中心として運営される中央集権国家であったため、クロアチア民族とセルビア民族の間で国家統治制度を巡って対立することになる。まずは、独裁制が施行される前の議会政治期におけるクロアチア民族政党の政治的主張を整理しておきたい。

クロアチア民族政党は集権体制に反対することで一致していたものの、その程度には各政党によって様々なレベルがあった。まずは与党セルビア民族政党の国民急進党に次ぐ、野党第一党のクロアチア農民党が挙げられる。同党はクロアチア民族の最大支持政党であり、連邦制導入を主張していた。同党の前身政党は、19 世紀末より反教権主義を掲げていたが、農民主義を唱えて教会の影響力が強かった農民層に急速に支持を広げていた。次に「権利主義」を堅持し、反教権主義の姿勢を取るクロアチア権利党が挙げられる。後にクロアチア独立国で最高指導者の地位に就くことになるアンテ・パヴェリチは同党に所属し、当初より「分離主義」に基づくクロアチア民族国家建設を志向した。ただ、クロアチア農民党と比べると、その勢力は微々たるものであった[21)]。そして最後に 19 世紀末に開始されたカトリック運動の流れから 1919 年に設立された初のカトリック民族政党、クロアチア大衆党が挙げられる[22)]。同党は民族間の平等を前提として、同じく「ユーゴスラヴィア主義」を容認していたスロヴェニア人民党に接近し、集権体制に対して穏健的反対の姿勢を示した。つまり、クロアチア大衆党は集権主義を唱えるセルビア民族政党と分離主義を唱えるクロアチア農民党及びクロアチア権利党の間の中道派に位置していた。同党は、信仰心が未だに民族意識よりも強い地域であるヘルツェゴヴィナやダルマチアの後背地そしてバチュカ地方を主たる支持基盤にしていたが、クロアチア＝スラヴォニアやボスニア・ヘルツェゴヴィナではカトリック系クロアチア人

20）Biondich, op. cit., p.434.

21）門間卓也、前掲論文、35-41, 48-49 頁。

22）教皇ピウス 10 世が 1905 年に出した回勅「イル・フェルモ・プロポジト：(確固とした決意)」により、カトリックの政治参加が可能になっていた。松本佐保、前掲書、72-74 頁。

の支持を得ることはできなかった[23]。事実、クロアチア大衆党は反教権主義を貫いていたクロアチア農民党と協調することができず、1927 年の国勢選挙ではわずか 1 議席しか得ることができなかった。クロアチアにおける票数は全体の 2% を得るにとどまり、クロアチア政治の周縁であり続けた[24]。

ところで、カトリック政治運動の背後にあるカトリック教会及び信徒を取り巻く環境は如何なるものだったのだろうか。ユーゴ王国は多様な宗教を抱えていた上に、いくつかの地域では複雑に入り組んで混在していた[25]。そうした中、事実上の国教としての地位を与えられていたセルビア正教は、勢力を拡大させていった。それは例えば、(1) カトリック教徒が多数を占めていた地域に正教会の教区を設置する。(2) 政府の社会政策（雇用、補助金の配分）においてセルビア民族並びに正教会を優遇するといった形で現れた。その結果、大戦間期だけで約 20 万人が正教へと改宗したと言われている。これは主としてクロアチア人カトリック教徒だった。長らくカトリックと正教が共存していた地域で他の宗派への乗り換えが起きたことは、クロアチア人の信仰心の弱さを露呈することになった。これにより、カトリック聖職者やクロアチア民族主義者双方に不満が鬱積していく[26]。一方、ボスニア・ヘルツェゴヴィナでは、サラエヴォ大司教シャリチ[27]が教会組織の拡大に努めていた。彼が 17 つの新たな

---

23) Mark Biondich, “Radical Catholicism and Fascism in Croatia, 1918-1945,” *Totalitarian Movements and Political Religions,* 8(2), 2007, pp.383-384.

24) 門間卓也、前掲論文、91-92 頁。

25) ジョセフ・ロスチャイルド（大津留厚監訳）『大戦間期の東欧－民族国家の幻影－』刀水書房、1994 年、200 頁。

26) Jozo Tomasevich, *War and Revolution in Yugoslavia, 1941-1945 : Occupation and Collaboration,* Stanford, California : Stanford University Press, 2001, pp.523-524.

27) Ivan Šarić（1871-1960）. 1922 年にサラエヴォの大司教の座に就いた。大司教区内では平信徒の運動、カトリック・アクションの組織化における積極的な役割を果たした。1922 年にはまた、週刊新聞『Nedjelja』を発行した。同紙は後にカトリック系週刊新聞『カトリチュキ・ティエドニク Katolički tjednik』と改名した。クロアチア独立国が建国されると、ウスタシャ政権の積極的な支持者となる。戦後、マドリッドに亡命し、同地では新約聖書をクロアチア語に訳すなどの活動を行っている。1960 年、同地で死亡。遺骸はサラエヴォにある聖ヨゼフ教会で埋葬された。Sabrina P. Ramet, ed., *The Independent State of Croatia 1941-45,* 1st ed., London : Routledge, 2015, p.99.

教区を設置したことにより、同地ではカトリック教徒が増えていったのである[28)]。

そして 1928 年、クロアチア農民党の党首ラディチが議場で国民急進党員に銃撃される事件が起き、クロアチア民族政治家たちの王国政府に対する不信感がさらに高まった。国王アレクサンドルは民族間の政治的混乱を収束するために議会制を停止し、国王独裁制の施行を宣言する。これを以てクロアチア大衆党は解党し、またクロアチア権利党も活動停止を余儀なくされた。以後、ユーゴ王国の議会制民主主義は崩壊し、権威主義体制が敷かれることによって、クロアチア民族の急進化に拍車がかかった。アンテ・パヴェリチはユーゴスラヴィアを去り、亡命先のイタリアで 1930 年にウスタシャを設立させた。そしてクロアチアのカトリック教会にとっても国王独裁制が施行されて以後、セルビア民族とセルビア正教を優遇しているように思われるユーゴスラヴィア国家をすすんで受け入れることはできなくなった。その過程でカトリック運動は青少年組織を中心として、急進化していくことになる[29)]。

1.3　クロアチア・カトリック運動と聖職者の急進化

まず 1920 年代のカトリック運動を概観した上で、国王独裁制期の一部教会勢力の急進化を確認したい。建国当初より、カトリック運動は民族政党として政治に関わるクロアチア大衆党の他に、「カトリック・アクション」[30)]、学術団

28）*Ibid.,* p.527.

29）Mark Biondich, “Faschistizing Catholicism in interwar Croatia,” in Jan Neils, Anne Morelli and Danny Praet, eds., *Catholicism and Fascism in Europe 1918-1945,* Hildesheim, Zürich, New York : Olms, 2015, pp.360-361.

30）「カトリック・アクション」とは 1922 年のピウス 11 世の勅令に基づき開始された信徒の組織化及び教化運動のことである。既に 1926 年にはサラエヴォ大司教シャリチが、同運動の推進を提唱している。国王独裁制によって一時途絶えた後、1935 年にザグレブの司教会議もカトリック・アクションの実践を宣言している。Sandra Prlenda, “Young, Religious, and Radical : The Croat Catholic Youth organizations, 1922-1945,” in John R. Lampe and Mark Mazower, eds., *Ideologies and National Identities : The Case of Twentieth-Century Southeastern Europe,* Budapest, New York : Central European University Press, 2004, pp.94-95.

体や雑誌、青少年組織から成り立っており、種々雑多で政治的に分裂していた[31)]。これらは政治的統一性を持たず、アジェンダを持つこともない分裂した状態にあった。

ところが、国王独裁制が施行されたことにより、多くのクロアチア・カトリック活動家たちが民主主義を放棄し、急進的な動きを見せることになる。特に1920年代後半と1930年代前半に成熟した若い聖職者、カトリック系知識人及び学生たちは機能不全の議会制民主主義及び独裁制を経験することになったため、その傾向が強かった。

そうした背景でカトリック運動は新しい組織形態を集約し、より過激な政治思想を表現していくことになる。その中で最も支持を獲得した運動が1930年に結成されたカトリック青少年組織「大十字軍」であった。以下ではカトリック青少年組織の変遷を辿り、一部教会勢力とウスタシャの合流点を確認したい。

1919年頃より開始された「鷲団 Orlovstvo」は19世紀後半から活動していたチェコの体育協会ソコルを模範としており、体育教育を通じてカトリック教義を青少年層に浸透させること、またそれによりクロアチア民族社会の統合を推し進めることを目的としていた[32)]。1923年にはピウス11世の勅令に基づき開始された「カトリック・アクション」への応答として、各クロアチア青少年組織を統括するクロアチア鷲団連盟が設立されている[33)]。同連盟は平信徒の運動ではあったが、聖職者も参加するなど教会支配層がかなりの影響力を行使しており、世俗的自由主義、共産主義への対抗意識を強く持っていた。連盟の代表であるイヴォ・プロトゥリパツ[34)]やイデオローグのイヴァン・メルツは宗教

31）Biondich, op.cit., p.360.

32）門間卓也、前掲論文、92頁。

33）1926年に同連盟はクロアチア＝スラヴォニア、ダルマチア、及びボスニア・ヘルツェゴヴィナ地域に160団体及び13支部を擁して分布し、会員数は9,694名を数えた。同上論文、92頁。

34）Ivo Proturipac（1899-1946）．弁護士。1935年には、後にザグレブ大司教となるステピナツから「カトリック・アクション」の代表に任命される。

教育や身体的規律を通じてクロアチア人の間にカトリックの新たな世代を養育することを目的としており、そのために手の込んだ方法論や生活の規則性、外見の装飾（制服、エンブレム、旗、歌）、スローガン（供犠、聖餐、宣教活動）そして敬礼（「神は生きている！」）を導入し、団結と急進的カトリシズムを明白に示していった[35]。ここで強調しておきたいのはクロアチア鷲団連盟の第一の目的があくまで公共生活における「再キリスト教化」であって、クロアチア民族の権利を向上させること以上に重視されたということである。しかしカトリック青少年組織運動は国王独裁制の施行を一つの分岐点として、徐々にイデオロギーの転換を見せ始める。

国王独裁制開始後、民族名を冠した全組織が廃止されたことに伴い、クロアチア鷲団連盟も活動停止となった。さらに 1929 年には新たな国家組織としてユーゴスラヴィア王国ソコルが設立されたことを受けて、カトリック教会はユーゴ王国政府とソコル運動への反発を強めていった。こうして教会勢力は宗教共同体としての民族の統合を求めるようになり、1930 年に新たなカトリック青少年組織「大十字軍兄弟団 Veliko križarsko bratstvo」（以下「大十字軍」）がプロトゥリパツによって結成された[36]。この「大十字軍」の成員がクロアチア独立国で創設されるウスタシャの青年教化組織であるウスタシャ青年団に流入していくことになる。同組織は傘下に「大十字姉妹団」を組織し、共にザグレブに本部を置いて各地域には支部を設置した[37]。また機関紙として週刊新聞『日曜日 Nedelja』や隔月誌『十字軍団 Križarska straža』を発行した。「大十字軍」では体育訓練に代わって、青年子女に対する教育を通じて新しい世代を養育することが試みられた。その内容は神学講義のみならず、組織運営そして社会・政治問題及びクロアチア史に係る教育に至るまで様々だった。団員には教

35）Biondich, “Radical Catholicism and Fascism in Croatia,” p.388.
36）門間卓也、前掲論文、93 頁。
37）1935 年に発行されたパンフレットの記述に従えば、同年 8 月に「大十字軍」に含まれる団体数は 240 に上り、団員数は成年 6,000 名、青年子女 4,000 名となる。同上論文、93 頁。

会での集会や宗教行事への参加が義務付けられた[38]。こうした教育方法は団員が農民や労働者などの初等教育しか受けていない人々に対して行われたため、献身的で活動的なカトリック信者を創出するには効果的であったとされる[39]。また「クリスマス・アクション」や「イースター・アクション」などの慈善活動を行い、労働者に食料と衣服を分配した。共産主義者のプロパガンダに最も影響を受けやすいと考えられた労働者階級の団員を確保し、信仰を捨てた人々を取り込む狙いがあった[40]。

ところで、「大十字軍」の活動を支えるイデオロギーは如何なる形態を取ったのだろうか。実際、彼らが採用したのは民族統一を強調する「大クロアチア主義」だった。これは、クロアチア民族の「歴史的領土」をクロアチア＝スラヴォニア（スリイェム地方を含む）とダルマチア、加えてボスニア・ヘルツェゴヴィナとバチュカ地方までを含むものとされた。大十字軍の活動家たちはカトリック・アイデンティティとクロアチア人の民族意識を結束させるために、これらすべての地域で活動を展開していった。機関紙において「ユーゴスラヴィア主義」が言及されることは滅多になく、代わりに「祖国」が強調されるようになる。「祖国」は、クロアチア中世王国、さらにその王国と教皇との関係を祈念する物語そして表象された「大クロアチア」とその歴史として理解された。大十字軍が掲げたスローガンは「神、教会、祖国」であり、急進的カトリシズムと統合クロアチア・ナショナリズムの混ぜ合わせだった[41]。

同時に 1930 年代を通じてカトリック運動はユーゴ王国内で高まる民族問題の波に飲み込まれていき、大十字軍は組織内部で分裂していくことになる。プロトゥリパツは次第に「分離主義」の動きを強め、反教権主義を弱めていたクロアチア農民党の党首ヴラトゥコ・マチェクと協調するようになった[42]。このようなプロトゥリパツの動きはクロアチア農民党に反感を抱いていた大十字軍

38）Prlenda, op. cit., pp.90-93.
39）Ibid.
40）Ibid.
41）Biondich, op. cit., pp.388-393.
42）門間卓也、前掲論文、93 頁。

の活動家たちには受け入れられず、1933 年頃になると、大十字軍の左派組織の活動家たちの中には、代表的な民族知識人だったイヴァン・オルシャニチ[43]と結びつき、雑誌『フルヴァツカ・スモトラ Hrvatska smotra』と提携する集団が現れた。こうした「大十字軍」内部の政治的派閥主義はカトリック司教団を介入させる契機になった。1935 年に「カトリック・アクション」の代表に任命されていたプロトゥリパツは、二年後に内部の反対によって代表を退き、さらに 1938 年には「大十字軍」の政治的方針を警戒したザグレブ大司教ステピナツ[44]によって「大十字軍」の代表を解かれた。しかし、プロトゥリパツは翌年、枢軸国陣営で設立されていた青少年組織を模倣して、軍事的形態を備えた新たな青少年組織「クロアチアの英雄」を結成した。同組織には大十字軍の団員が多数流入することになる。さらに「クロアチアの英雄」内部には「英雄防衛隊」の名の下に聖職者用の軍事訓練部隊が創設されていた[45]。ここにカトリック教会勢力内部にウスタシャ運動と類似したファシズム的志向が確認される。司教たちはプロトゥリパツのカリスマ性とカトリック運動内部の政治的派閥主義双方に苦しめられた。司教団は「カトリック・アクション」、「大十字軍」そしてカトリック系出版物を一掃する計画を企てたが、運動の高まる政治化と右傾化を防ぐことはできなかった[46]。確認しておきたいのは、カトリック青少年組織を中心に一部教会勢力が急進化していったということであり、それゆえ民族社会の関係でいえば、民族国家樹立を目指すウスタシャやクロアチア農民党の右派勢力と合流していったということである。

43）Ivan Oršanić（1904-1968）．学生時代からカトリック信徒団に属し、その後ユーゴ王国期のウスタシャ運動の一つの拠点とされた機関誌『クロアチア民族』の編集に関わる。クロアチア独立国では、ウスタシャ青年団の運営司令官として指導部の中枢にいた。同上論文、75、80 頁。

44）Alojzije Stepinac（1898-1960）．ユーゴ王国期にはローマの神学校で学んだ後、司祭に任命された。1937 年から前任のバウエルの後を継いでザグレブ大司教の座に就く。ステピナツは 19 世紀にシュトロスマイエルによって開発された、宗派混合の「ユーゴスラヴィア主義」を忌み嫌っていた。Vjekoslav Perica, *Balkan Idoles : Religion and Nationalism in Yugoslav States,* Oxford : Oxford University Press, 2002, p.19.

45）門間卓也、前掲論文、93 頁。

46）Biondich, op. cit., p.390.

カトリック教会勢力の統合ナショナリズムを伴った急進的カトリシズムへのシフトには、二つの問題が決定的に影響していた。第一に、1937 年に起きたコンコルダート（政教協約）の批准の失敗である。カトリック教会は組織的中心がバチカンにあったため、法的地位が保障されるためには、バチカンと王国政府との間でコンコルダートが結ばれる必要があった。しかし、国教としての地位が揺らぐと考えたセルビア正教会の猛烈な反対運動により、結局批准は果たされず、カトリック教会はさらに不遇な立場に置かれることを確信した。そしてまた、カトリックとクロアチア人の利益はセルビア人及び正教徒が支配的なユーゴ王国の中では満たされないというカトリック運動の信念を焚き付けることになる。大司教ステピナツも 41 年 3 月の日記の中で、セルビア正教会への不満を露わにしている[47)]。第二に、スペイン内戦が一部の教会勢力とクロアチアの右派勢力を結びつけた。彼らは民主主義を、スペインやクロアチアのような社会では実現不可能なものであると見做した。カトリック系知識人であるイヴォ・ボグダン[48)]は「スペインは民族問題にも、差し迫った社会、政治問題にも対処できないリベラル・デモクラシーの典型的な失敗例である」と記している。多くのカトリック系雑誌が次第に右翼の権威主義政権に同調し、反共産主義とスペインの過激な愛国主義を称賛した。そして聖職者の中にはスペインの例から枢軸国陣営にクロアチアの独立を達成するための可能性を見るものが現れた[49)]。

要するに、1930 年代を通じて、クロアチアのカトリック運動とウスタシャとの間には共有するものが多くみられるようになっていた。しかし、このことはカトリック教会勢力がナチズム及びファシズムに同調したということを意味しない。反対にカトリック系雑誌は繰り返しナチ・イデオロギーの危険性を指

47）Tomasevich, op. cit., p.553.

48）Ivo Bogdan（1907-1971）．ユーゴ王国期にはカトリック青年組織「ドマゴイ」会長を務める。王国内では、ジャーナリストとしてウスタシャ運動にも参画。クロアチア独立国では、プロパガンダ総司令部長官にも就任した。門間卓也、前掲論文、156 頁。

49）Biondich, op. cit., p.390.

摘していた。シベニクの教区司祭でカトリック系知識人であったイヴォ・グベリナ[50]は1939年のドイツのポーランド侵攻を受けて、カトリックの悲劇として次のように記している。「この“悲劇”の責任は他ならぬ国民社会主義にあり、カトリック教徒として我々はナチの侵攻に強い懸念を感じずにはいられない」[51]。とはいえ、ナチズムに危険性を抱きつつも、一部の聖職者集団が結果的に目をくらまされたのは、大戦間期に高まった「独立」という積年の希望を保持していたからだった。

以上見てきたように、カトリック教会は戦間期を通じてセルビア民族中心の支配に不満が高まる一方だった。カトリック教会の利益がユーゴ王国内で満たされないことが分ると、一部の教会勢力は独立を志向し、ウスタシャを始めとする急進右派集団と交流する動きが見られた。しかし、その一方でステピナツ及び教会支配層を始めとする聖職者は「大十字軍」の活動に懸念を抱いていた。他方、イタリアが戦間期に併合したイストリアなどの地域では、イタリア・ファシズムに対して国民的アイデンティティを維持するために、セルビア民族を同盟者として見る聖職者も存在した[52]。以上のことから、戦間期を通じて高められたナショナリズムによって、ウスタシャと合流する聖職者集団がいたものの、聖職者の動向を一面的に捉えることは避けなければならない。そして、各聖職者の戦間期の姿勢は、クロアチア独立国下のウスタシャ運動に対する反応に明白に現れ、さらに分裂の度合いを高めていく。続く第2章では、クロアチア独立国において聖職者が、政権を担うウスタシャにどう関わっていくのか、その動向について論じる。

50）Ivo Guberina（1897-1945）．シベニクの教区司祭。青年期にはクロアチア農民党に加わっていたが、次第にユーゴ王国政府に対する反発を強め、クロアチア鷲団連盟及び「大十字軍」を指導する存在となった。1940年にイタリアに渡り、ウスタシャ運動に参画。クロアチア独立国では政府のイデオローグとしても活動し、反セルビア民族的主張を展開した。門間卓也、前掲論文、179頁。

51）Biondich, op. cit., p.392.

52）Vjekoslav Perica, *Religion and Ethnic Nationalism : The Making of the “Church of the Croats”*（International conference : Novi Sad-Sremska Kamenica, 27.10. 2009）, URL : https://chdr-ns.com/pdf/documents/srkamenica2009_vjekoslav_perica.pdf［accessed 2019-11-30］

クロアチア独立国及び周辺地域の版図（1941/42 年）

出典：Matjaž Klemenčič and Mitja Žagar, *The Former Yugoslavia's Diverse Peoples: A Reference Sourcebook*, California: ABC-CLIO, 2004, p. 155.

第 2 章　クロアチア独立国における聖職者の動向

第二次大戦が勃発し、41 年 4 月のナチ・ドイツを中心とする枢軸国勢力の侵攻を以て、ユーゴ王国は崩壊した。同月 10 日、枢軸国の支援を受けたウスタシャはクロアチア独立国の建国を宣言する。同国の誕生は、当初クロアチア農民党[53]の右派勢力の一部と多くのカトリック聖職者及び知識人に支持された[54]。最高指導者の地位にはアンテ・パヴェリチ[55]が就き、国土はクロアチアとボスニア・ヘルツェゴヴィナの全土、一部セルビア地域を含んだ[56]。以後、政権を担ったウスタシャは自らのナショナリズムに基づく急進的な統治体制の確立に向けて邁進していく。以下では、まずクロアチア独立国におけるウスタシャの統治について簡潔にまとめる。

ウスタシャは政権成立直後よりセルビア民族、ユダヤ人及びロマを対象に排外主義的政策を実行した。それは、ヤセノヴァツ強制収容所に象徴されるようなウスタシャ独自の人種思想及び民族概念に基づくものだった。しかし、同国はドイツ軍とイタリア軍が駐留する傀儡国家であったため両国への譲歩は免れ

53）ナチ・ドイツは最初、クロアチア農民党党首のヴラトゥコ・マチェクに政権担当を要請していた。マチェクは要請を断ったが、クロアチア人に向けてクロアチア独立国に従うように呼びかけた。マチェク中心とするクロアチア農民党はナチ・ドイツに対して積極的に抵抗するのではなく、連合国の勝利を期待して、待機主義の立場を採る。門間卓也、前掲論文、123-124 頁。

54）Mark Biondich,“Religion and Nation in Wartime Croatia”p.79.

55）Ante Pavelić（1889-1959）．オーストリア＝ハンガリー帝国治下のボスニア・ヘルツェゴヴィナの小さな村、ブラディナに生まれる。ユーゴ王国では、クロアチア権利党に所属し、国王独裁制開始に伴いイタリアに亡命。同国でウスタシャを結成する。なお、クロアチア権利党員の多くがウスタシャに合流したとされる。クロアチア独立国誕生に伴い、ザグレブに帰還し首相に就任する。クロアチア独立国崩壊後は、アルゼンチンに亡命した。Iordachi,“Fascism in Southern Europe”p.426.；門間卓也、前掲論文、105 頁。

56）1941 年末の段階でクロアチア独立国全土の人口は、663,157 人。またドイツ外務省の史料によれば、民族はおおよそクロアチア人が 330 万人、セルビア人が 192 万 5 千人、ムスリムが 70 万人、ドイツ人が 15 万人、ハンガリー人が 7 万 5 千人、ユダヤ人が 4 万人、スロヴェニア人が 3 万人、チェコ人及びスロヴァキア人が 6 万 5 千人で構成されていた。同上論文、107 頁。

ず、統治体制は脆弱なものだった。加えて、迫害や虐殺といった政策は大衆層に支持されず、さらにはパルチザンやチェトニクの台頭を招くことになり、国内の安定性は保たれなかった。こうした背景からウスタシャのイデオロギーは、セルビア民族に対して、排外主義から「同化」に基づく統治イデオロギーの変更を迫られた。これは、後述するように強制改宗、クロアチア正教会の創設という形で現れることになる。しかし、急進的性格が失われたわけではなかった[57]。ウスタシャは政権と国家への忠誠を大衆層に呼びかけ、排他的かつ統合主義的イデオロギーの実践を通じて民族動員に努めていった[58]。

本章では、そうした排外主義と統合主義で揺れ動くウスタシャ運動に対するカトリック聖職者の動向を詳述する。

2.1　追放と大量虐殺

クロアチア独立国の建国はカトリック聖職者に総じて好意的に受け止められた。確かに枢軸国に危険性は感じていたものの、独立国家の誕生はカトリック聖職者にとっても過去の周縁状態から脱却する機会であるように思われた。さらに中絶、ポルノグラフィーの禁止など「キリスト教の原則」をクロアチア社会に導入しようとしているウスタシャ政権を歓迎した[59]。事実、ザグレブ大司教ステピナツは 1941 年 4 月 28 日にクロアチア独立国の誕生を祝して以下のような回状を聖職者宛に発出している。

> ついに積年の願望を実現するときがきました。いま私たちに必要なのは言葉ではなく、祖国と共に血を流す覚悟です。それこそが神の意に適ったこ

57）同上論文、138 頁。

58）本稿では、直接扱わないが、ウスタシャ政権はカトリック教義を利用して民族の動員を図っていたとされる。クロアチア独立国におけるカトリック教義の政治利用については、以下を参照。Stipe Kljaić, “Apostles, Saints’ Days, and Mass Mobilization,” in Rory Yeomans, ed., *The Utopia of Terror : Life and Death in Wartime Croatia,* Rochester : University of Rochester Press, 2015, pp.159-161.

59）Ramet, *The Three Yugoslavias,* p.40.

となのです。…祖国がついに独立できたことは、私たちを喜びで満たしていますが…これは、神が既に定めていたことなのです。聖職者も祖国に貢献しなければなりません。…なぜなら、祖国の独立は神の御業なのですから[60)]

同回状は聖職者に対して政治運営への協力を促す内容でもあった[61)]。さらにステピナツは同年6月に開かれた司教団の会合でカトリック教会の代表として、パヴェリチに「我らが祖国のより良い将来に向けた誠実なる連携」を表明している[62)]。また、ボスニアのカトリック聖職者ドラグティン・カムベル[63)]はパヴェリチを「時代、新しさそして唯一の計画のヒーローであり、過去に殉じた復讐者である」と礼賛した。これは下位層の若い聖職者たちの反応を集約したものだった[64)]。さらにユーゴ王国期からウスタシャ運動に参加していた聖職者イヴォ・グベリナは「東方でカトリック信仰の前哨に立つ」ことを神の摂理が定めた任務とし、「傍観は、創造主に対する罪」として直接行動へと駆り立てた[65)]。

このような建国当初のカトリック聖職者の熱狂的な感情はウスタシャ政権に教会のお墨付きを与えたと言える。以後、教会はウスタシャ部隊に多くの従軍司祭を派遣し[66)]、グベリナを始めとする多くの聖職者が「知識人」としてウス

60）Biondich, “Controversies surrounding the Catholic Church,” pp.440.；ロバート・D・カプラン（宮島直機・門田美鈴訳）『バルカンの亡霊たち』NTT 出版、1996 年、42 頁。

61）門間卓也、前掲論文、135 頁。

62）同上論文、135 頁。

63）Dragutin Kamber（1901-1969）. ユーゴ王国ではサラエヴォの教員養成校でカテキスタを務めた。クロアチア独立国ではボスニア・ヘルツェゴヴィナ地域の従軍司祭の職務を担う。戦後はアルゼンチン、アメリカ、カナダなどに亡命。同上論文、133 頁。

64）Biondich, op. cit., p.440.

65）清水明子「「クロアチア独立国」におけるセルビア人虐殺（一九四一～四二年）」松村高夫・矢野久編著『大量虐殺の社会史－戦慄の 20 世紀』ミネルヴァ書房、2007 年、98 頁。

66）佐原徹哉『ボスニア内戦：グローバリゼーションとカオスの民族化』有志舎、2008 年、35 頁。

タシャの地域統括機構やプロパガンダ体制に関与するようになった。さらにユーゴ王国で結成されたカトリック青少年組織「大十字軍団」の成員もウスタシャ運動への協力姿勢を示し、その一部はウスタシャ青年団の活動に取り込まれていくことになる[67]。

ただし、ステピナツにとってウスタシャ政権への支援は、国家の中でカトリック教会が自由を享受できることが前提であった。その後、カトリック教会の権利が制限されていることを徐々に認識し、迫害行為や大量虐殺の横行を耳にすると次第に政権と距離を取るようになっていく。ここで確認しておきたいのは、ステピナツのクロアチア・カトリック教会の指導者としての立場である。1941 年のクロアチアの司教団は 2 つの大司教区と 11 の司教区で構成されており、その中でザグレブ大司教が最も大きな影響力を持っていたことは確かである[68]。しかし、このことはステピナツが戦時期のウスタシャの政策を指揮するわけではないのはもちろんのこと、司教団や各聖職者の振る舞いを命令する立場にあることを意味しない[69]。ウスタシャ政権が展開する排外主義的政策が、各聖職者の動向を左右することからも明らかである。以下では、ウスタシャ政権成立直後に見られる追放と大量虐殺の展開を通して、聖職者の動向を見ていく。

建国直後よりウスタシャはクロアチア独立国から「民族の敵」を排除することを目的に法的整備を行った。1941 年 4 月 30 日、「国籍に関する法令」及び「人種帰属に関する法令」「アーリア人血統及びクロアチア民族の名誉の保護に関する法令」が公布された。これらの法令がセルビア民族やユダヤ人、ロマに対する迫害を正当化することになる。ウスタシャはナチ・イデオロギーの影響を受け、「アーリア人種」の優位性を唱えており、クロアチア民族も含まれると主張した。一方、セルビア民族はカトリックから正教に改宗した「アーリア

67）門間卓也、前掲論文、135 頁。

68）Biondich, op. cit., p.440. 当時国内には 2 つの大司教区と 11 の司教区が存在したが、ダルマチアに位置する 7 つの司教区は、41 年 5 月と 9 月のうちにイタリアに編入されるかイタリア軍の占領下に置かれていた。

69）Ibid.

人」と分類されたものの、クロアチア民族の独立国家樹立を妨げてきた民族として法的保護を受けることはできなかった。

ウスタシャ当局が主導した最初の排外主義的政策は、ドイツとの協力の下で行われた「追放」だった。1941 年 6 月にザグレブで開かれたドイツ側との会合では、スロヴェニア占領地域のドイツ化を進めるためにスロヴェニア民族をクロアチア独立国に移住させ、独立国内に居住するセルビア民族をドイツの傀儡政権が樹立していたセルビア領へ移住させる計画が協議された。しかし、ドイツ側にとって多くのセルビア民族の流入が占領政策の障害になったため、新たな「セルビア人問題」の解決がパヴェリチとヒトラーとの間で協議されることになる[70)]。

会談後、次なる選択肢としてウスタシャ当局が着手したのは大量虐殺であった。大量虐殺はセルビア民族の強制摘発による殺害とヤセノヴァツなどの強制収容所への移送による計画的な殺害という形で実行された[71)]。

ウスタシャ指導部は建国当初からセルビア民族が「真のクロアチア人国家」建設の最大の障害と捉える内容の宣伝を繰り返した。1941 年 6 月 22 日に教育大臣ミレ・ブダクがゴスピッチで行った演説はウスタシャによる「セルビア人問題」解決のための政策を反映していた。ブダクは演説で「国内のセルビア人の三分の一を追放し、三分の一を虐殺し、三分の一をカトリックに改宗させクロアチア人にする。そうすれば、新しいクロアチアから完全にセルビア人を排除でき、十年以内には 100% のカトリック化が可能である」との政策目標を語ったとされる[72)]。

カトリック聖職者も、反セルビア民族的宣伝を展開していた。ウスタシャのドボイ地区長官に任命された聖職者カムベルは、「クロアチア人とクロアチア

70）佐原徹哉、前掲書、39-40 頁。
71）門間卓也、前掲論文、127 頁。
72）佐原徹也、前掲書、39 頁。ただし、ブダクのこの発言については近年の研究で一部疑問視する声もある。Tomislav Dulić, “Rethinking violence : Motives and modes of mass murder in the independent state of Croatia, 1941-5” in Cathie Carmichael and Richard C. Maguire, eds., *The Routledge History of Genocide,* London : Routledge, 2015, p.154.

にとって、「セルビア人問題」以上に重要なものはない」とし、セルビア民族がこれまでクロアチア民族領土に侵入しクロアチアを分断してきたことを非難した[73]。また、サラエヴォ大司教座発行のカトリック系週刊新聞『カトリチュキ・ティエドニク Katolički tjednik』の 1941 年 6 月 15 日号には次のような記事が掲載された。

> 統領（アンテ・パヴェリチ）の戦いは明らかに聖なる定めに従っている。闘争を通じて、定めは統領の胸に深く刻まれ、かくも素晴らしい結果を達成された。統領の戦いは正義の戦いであり、悪に向けられたものであるが故にこれほどにも歓迎されるのだ。…クロアチア民族にとってセルビア民族は最大の敵であり、ユダヤ人、フリーメイソン、共産主義者と並ぶ悪の手先である[74]。

クロアチアのカトリック教会の政治思想は一枚岩ではなかったが、一部の聖職者の主張が、建国当初のウスタシャが展開する民族主義的イデオロギーと同調していたことに注目したい。

次にウスタシャの排外主義的政策に対する聖職者の動向も見ていきたい。まず初めにウスタシャと距離を取り始める聖職者を扱う。ステピナツは迫害を正当化する法令の制定やウスタシャによるセルビア民族やユダヤ人の迫害を受けて、次第に指導部と距離を取り始める。また、そうした傾向はとりわけ高位聖職者に多く見られた。次のステピナツの発言は建国当初から指導部に事態の改善を求めていることがわかる例である。1941 年 5 月、クロアチア中央部の都市グリナで数百名のセルビア人が虐殺されたとグリナ教会区の司祭から報告を受けたステピナツは、以下の様な私信をパヴェリチ宛に出している。

> たった今、私はグリナで 260 人のセルビア人が何の捜査も裁判もなく殺害

73）清水明子、前掲論文、99 頁。
74）Dedijer, *The Yugoslav Auschwitz and the Vatican,* p.130.

されたとの知らせを受けました。過去 20 年の間、セルビア民族が重大な罪を犯したことは知っています。しかし、今回のことはカトリック教義には則さず、私は司教として声を挙げる責任があると考えています。ですので、死に値する罪でない限り、セルビア民族が誰一人として殺されないよう、クロアチア独立国の全域で緊急の処置を取ることを求めます[75)]。

このようにステピナツはパヴェリチに迫害行為を中止することを要請していた。しかし、ステピナツの個人的な抗議はセルビア人の処遇を決めていたウスタシャ当局に如何なる効果ももたらさなかった。以後ステピナツは同年 7 月にも収容所への移送中に残虐行為が行われていることを指摘し、そしてその改善策をパヴェリチに進言している。このようにステピナツがパヴェリチに事態の改善を求めていることから分かる通り、迫害行為は無責任なウスタシャ成員によって行われており、最終的に当局によって責任が問われるだろうと信じていたことを意味している。しかし、実際は残虐行為に加担しているウスタシャ成員と指導部の間の考えは軌を一にしていた。

以上のことは先に述べたヒトラーとの会談において、イタリアの外務大臣ガレアッツォ・チャーノがパヴェリチによるカトリック教会への言及を日記に記していたことから確認される。日記によれば、パヴェリチは「カトリック聖職者、特に下位層はウスタシャに好意的な態度を取っているが、教会指導者はそれほどでもない。何人かの司教は政権に敵対的だ。」と述べた[76)]。

一方、ウスタシャの排外主義的政策に直接手を染める形で加担したのは、どのような聖職者だったのだろうか。まず、ウスタシャはヘルツェゴヴィナとダルマチアのフランシスコ会修道士に意欲的な協力者を見出した。中でも有名なのが、ヤセノヴァツ強制収容所の司令官だったミロスラヴ・フィリポヴィチであった[77)]。彼が残虐行為に加担したことはキリスト教の「汝、殺すなかれ」の

75）Biondich, op. cit., pp.440-441.
76）Ibid., pp.441-442.
77）Pål Kolstø, “The Croatian Catholic Church and the long road to Jasenovac” p.40.

道義に反していると見なされ、ヤセノヴァツ強制収容所に勤めている間に聖職を奪われることになった。また他にも従軍司祭としてウスタシャ部隊を率い、大規模な殺戮を遂行する形でウスタシャと協力する者もいた。

追放や虐殺といった残虐な行為は戦時末期まで続くが、そのような過酷な政策はセルビア民族の蜂起をもたらし、国内の治安の悪化、そしてウスタシャに対するクロアチア人の不信感を引き起こした。ドイツ側は情勢の不安定化を考慮して、ウスタシャ指導部に対してセルビア民族の社会的立場の改善を求めた[78]。以後、41 年 9 月から新たな政策としてセルビア人正教徒に対する強制改宗が実施されることになる。これはセルビア民族をクロアチア民族社会に統合する施策であった。しかし、この宗教政策は、実施を巡ってカトリック教会勢力との衝突を招くことになる。次節では強制改宗政策に対する教会側の対応と、ウスタシャ当局が主導する宗教政策に加担する聖職者を中心に検討していきたい。

2.2　強制改宗

セルビア人正教徒への改宗自体は政権成立直後から始まっていたが、ウスタシャ政府は当初、改宗を手緩い方法であると考えており、限定的に行われるに留まっていた。しかし、残虐行為による国内情勢の悪化から、「セルビア人問題」の解決がカトリックへの強制改宗という形で浮上した。この宗教政策は、ウスタシャ当局の主導で行われたため、カトリック教会と衝突する原因にもなったが、政策にはカトリック聖職者、特にフランシスコ会修道士が協力していた。そうした背景から、強制改宗政策はカトリック教会とウスタシャ当局の関係で最も頭を悩ませる問題になった[79]。

カトリック教会の強制改宗への対応について詳述する前に、セルビア人正教徒への強制改宗が如何にしてウスタシャによって正当化させられたのかを確認しておきたい。事実、改宗理論はウスタシャが独自に構築したものではなかっ

78）門間卓也、前掲論文、128 頁。
79）Biondich, “Controversies surrounding the Catholic Church,” p.442.

た。ウスタシャ政権が特に拠りどころにしたのは、1930年代にボスニアの聖職者で教会史家のクルノスラヴ・ドラガノヴィチ[80]によってドイツ語で著されたボスニアのカトリック教徒に関する歴史書であった。ドラガノヴィチの主張は、オスマン帝国統治下にあった16世紀から17世紀にかけて、ボスニア・ヘルツェゴヴィナ地域のクロアチア人カトリック教徒が正教に改宗させられたことが強調されている。彼は1463年のトルコ人の襲来について記した後、「ボスニアの土地にセルビア人の修道院が雨後のマッシュルームのように増大し、至る所に大量の正教徒が出現した」と述べ、「カトリック教徒は絶滅するか、奴隷に売られ、一方でさらに大勢のカトリック教徒は安全な地域に移住し、“追放、暴力そして放火”のために故郷を去った」と記した[81]。これに基づけば、セルビア人正教徒のカトリックへの改宗を元の信仰に戻っただけだと主張できた。ウスタシャはドラガノヴィチの理論をクロアチア独立国全域に適用し、クロアチア民族社会内の包摂を図った。だがこの理論は、ボスニア・ヘルツェゴヴィナ地域以外には歴史的事実と照らし合わせても確認できない[82]。しかし、ユーゴ王国期に多くのカトリック教徒が正教徒へと改宗したという事実が、ウスタシャによって歪められたドラガノヴィチの理論を正当化するのに役立った[83]。1942年初頭の強制改宗運動の最中に、ドラガノヴィチの論文の翻訳がサラエヴォのカトリック系雑誌に掲載されている。彼の考えは、ウスタシャ主導の改宗政策に学術的な根拠を提供しただけでなく、既に実施されていた大量虐殺をも正当化することになった[84]。ウスタシャだけが、ドラガノヴィチの理

80）Krunoslav Draganović（1903-1982）．ユーゴ王国期にはサラエヴォ大司教シャリチの秘書を務める。1943年8月にローマへ渡り、聖ヒエロニムス・ローマ教皇研究所の事務官を務める。ウスタシャの戦争犯罪者を主に南米へと亡命させる逃亡経路、所謂「ラットライン」の主なまとめ役。1967年ユーゴ当局につかまり、サラエヴォに戻される。Ramet, *The Independent State of Croatia 1941-45,* p.95-96.

81）Rory Yeomans, “Eradicating “Undesired Elements”: National Regeneration and the Ustasha Regime’s Program to Purify the Nation, 1941-1945” in Anton Weiss-Wendt & Rory Yeoman, ed., Racial Science in Hitler’s New Europe, 1938-1945, Lincoln: University of Nebraska Press, 2013, p.218.

82）Tomasevich, *War and Revolution in Yugoslavia,* p.539.

83）*Ibid.,* p.540.

84）Yeomans, “Eradicating “Undesired Elements””, p.218.

論を歪曲したわけではない。一部の聖職者、そしてカトリック教会側の対応にも影響を及ぼしたと思われる。

次に強制改宗政策の展開を概観したい。ウスタシャ政権は「強制改宗」を「追放」「大量虐殺」に次ぐ、国家内のセルビア民族を根絶するために用いる政策の三本目の柱としていた。改宗は、建国直後から政権が積極的に進めてきた政策ではなかったものの、41 年 5 月には既に制度化する目的で「改宗に関する法令」が敷かれていた。法令の中身からは、ウスタシャによる強制改宗運動の前兆はうかがえないが、当初から政権が宗教について考えていたことを示している[85)]。一方、カトリックの平信徒や聖職者の中からは、改宗は正教徒の人々が迫害を避けることができる唯一の方法だと盛んに言うものが出てきた。そのように二者択一を迫られたセルビア人は、個人的に、時にはセルビア人地域社会全体が助かるために改宗を選択した[86)]。

同年 7 月 14 日、法務・宗教省は改宗に関する綱領をクロアチアの全カトリック司教に通知した。綱領には改宗に関していくつかの制限が設けられており、中でも、セルビア人正教徒の東方典礼カトリック教会への改宗が禁止されたこと、そしてセルビア人知識人の改宗が禁じられたことは注目に値する[87)]。こうした政策の枠組みを開発したのは、若いフランシスコ会修道士ラドスラヴ・グラヴァシュだった。彼は、セルビア人知識階層はアイデンティティが強すぎるために改宗は認められないとし、その一方でセルビア人農民は大量に改宗させることができると考えていた。

これに対して、二日後の 16 日にステピナツの秘書ヨシプ・ラフが法務・宗教省宛に、綱領を受け入れることができないとの趣旨の書簡を発出した。教会側の立場としては、自発的意思に基づく改宗は誰もが認められるべきであって、改宗対象者がウスタシャによって選別されることには憂慮せざるを得なかった[88)]。そもそも、教会の役割であるはずの改宗に政治が介入してくること自

85）Biondich, “Religion and Nation in Wartime Croatia”, p.82.
86）Tomasevich, *War and Revolution in Yugoslavia,* p.535.
87）Biondich, op. cit., pp.82-83.
88）Biondich, “Controversies surrounding the Catholic Church,” p.443.

体が、教会権威に対する挑戦を意味していた。しかし、教会側はセルビア人の改宗を期待していないわけではなかった。ラフはセルビア人知識階層の改宗禁止に反対した上で、次のように主張している。「中産階級の宗派分離論者でも誠実かつ実直にカトリックへの改宗を決意したことが明らかならば、教会は如何なる時でも彼らを受け入れるべきである」[89)]。このように教会側の対応には、ウスタシャの強制改宗政策に対して異を唱えつつも、改宗を望む者を積極的に受け入れたい姿勢が見て取れる。

一方、ウスタシャは教会側の書簡を無視し、同月 30 日に再び司教たちに向けて綱領を通知している。結果的に、教会指導者の許可を得ることなく、政権に協力する教区司祭たちが現れるようになった。これは特にフランシスコ会修道士に見られる傾向であった[90)]。

同年 9 月 15 日、国家再生局（DRP）に宗教部門（以下 VO）が創設されたことによって、政権は改宗政策を前面に打ち出していった。VO の役目は改宗の進行を管理することだった。長官は若いフランシスコ会の従軍司祭ディオニジイェ・ユリチェヴが務めた。VO は改宗を執り行うために、急進的で若いフランシスコ会修道士や司祭を地方に派遣していった。派遣された聖職者はウスタシャ運動に傾倒した者が多く、しばしば暴力的な方法を用いたため、セルビア人農民に恐れられた。改宗儀式は地方のウスタシャ部隊が監視する中、強制的に行われた。さらに、改宗儀式には、国家を象徴する体裁が整えられていた。それは例えば、(1) 国家とウスタシャ組織を賛美する聖歌隊、(2) クロアチア国家とウスタシャの旗、(3)「統領 poglavnik」アンテ・パヴェリチの肖像、そして(4)ウスタシャ・ホールで催される公式の宴会など、それら全てが世俗的で、改宗に向けた国家の目的を強調していた[91)]。改宗を拒否すれば、殺害の脅しをかけられることもあり、時にはセルビア人を特定の場所に集め、殺害するための手段として用いられることもあった。「国家」の正当化及びパヴェ

89）Yeomans, “Eradicating “Undesired Elements”, p.217.
90）Biondich, “Controversies surrounding the Catholic Church,” p.443.
91）Yeomans, “Eradicating “Undesired Elements”, pp.218-219.

リチの神聖化はカトリック聖職者の側からもなされた。サラエヴォ大司教のイヴァン・シャリチは、本来宗教的祝日であるクリスマス（キリスト降誕祭）の日に、“ポグラヴニク（統領）に捧げる頌歌”と題した一連の詩編を日刊紙『ノヴァ・フルヴァツカ』に寄稿した。彼はポグラヴニクを称揚するために宗教的祝日を利用し、世俗の指導者を神聖化させていたのである[92)]。

続いて、モスタル司教アロイジイェ・ミシッチがステピナツに宛てたウスタシャによる残虐行為に関する報告を見てみたい。後に記すように、ステピナツは司教からの報告が増えてきたことを受けて、教会組織として対策を協議することになる。ミシッチ司教の管轄区であるヘルツェゴヴィナ地方では、一部のフランシスコ会修道士と聖職者が強制改宗、時には殺害に関与していた。その多くは従軍司祭であった。こうした事態を受けて、1941 年 6 月 30 日にミシッチ司教は聖職者たちに対し、政治に関与することを控えるよう命令し、教区民には他者を殺害した者及び占有した者は赦免されないだろうと述べている。1941 年 8 月 18 日には、地方のウスタシャ成員によって改宗した者までが殺されていると報告した。この報告の中でミシッチはステピナツに対して「このようなことは、神聖なカトリックの大義でもなければ、クロアチアの大義でもありません」と述べ、さらに「クロアチアと教会の利益において、我々はあらゆる力を総動員して、これらの破壊的な状況を防がなければなりません」と報告している[93)]。

こうした報告が増えたことを受けて、11 月 17 日から 18 日にかけてザグレブで司教会議が開かれた。ステピナツが議長を務めたこの会議では、正教徒のカトリックへの改宗について話し合われた。その結果、改宗に関する決議が司教団の名で公表され、その中で、改宗はカトリックの教義に基づいて、教会主導の下で行われるよう定められた[94)]。彼らは、改宗を執り行う司祭を任命するのは、我々司教のみに認められた権利であると考えていた。決議の後、ステピ

92）Kljaić, “Apostles, Saints’ Days, and Mass Mobilization,” pp.153-154.
93）Biondich, op. cit., pp.443-444.
94）Tomasevich, *War and Revolution in Yugoslavia,* p.539.

ナツは司教団の名でパヴェリチに手紙を送っている。その内容は以下の様に、如才ない言葉遣いで綴られていた。

> 誰もが神の子どもです。キリストは全ての者の犠牲となって、亡くなったのです。私たちは確信しています。ポグラヴニク（統領）、あなたが、その全ての権限を用いることで、特定個人に与えられた暴力を抑制することができることを。

司教団が取り決めた改宗に関する決議は、もし教会法に基づく規則が遵守されれば、進んで改宗政策への協力をほのめかすものだった。ただ、教会によって決議された改宗に関する規則もまた、ウスタシャ政府によって常に守られたわけではなかったのである[95]。

同年 12 月、VO の長官ユリチェヴはおそらく司教団の改宗に関する決議を受けて、パヴェリチに手紙を送り、東方典礼カトリック教会への改宗は禁止すべきと訴えた。司教会議において、セルビア人正教徒に対する改宗はローマ・カトリックよりも東方典礼カトリックへの改宗の方が好ましいとされたからである。ユリチェヴは、東方典礼への改宗はクロアチア国家にとって有害だと考えていた。彼は手紙の中で、改宗を許せば「東方典礼カトリック教徒は我々クロアチア民族の生物的基盤を食いつぶし、増加するでしょう」と主張している[96]。このことから、聖職者であるユリチェヴが改宗を教会側のように宗教的なものではなく、ウスタシャ政権の目的と合致するかのように、国家を強くするための道具として捉えていたことがわかる。

一方で、ユリチェヴは急進的イデオロギーにもかかわらず、改宗政策に熱心な従軍司祭たちの振る舞いと、単独行動に懸念を示し始めた。彼の懸念は政府の機関紙で従軍司祭たちの自己犠牲や暴力行為が称揚され名士扱いされていることに因るものだった。12 月からの報告では、聖職者として要求されている

95）*Ibid.*
96）Biondich, “Controversies surrounding the Catholic Church,” pp.444-445.

以上のことを行う司祭たちへの不平をこぼしている。ユリチェヴが当局の役人としての立場で話したところによると、改宗における政権の非宗教的目的と若い聖職者の多くに見られた宗教的衝動の間に緊張が走り始めていることを受けて、改宗の基礎が世俗の権威によって築かれなければならないと強調している[97)]。このことは、ユリチェヴが当局の改宗政策を統括する者としてウスタシャ政権に献身していることを示すとともに、一部の従軍司祭たちによる熱狂的な宗教的感情がしばしば暴力行為へと向かわせ、改宗政策の障害となっていることを意味した。そもそもウスタシャ政権内部でも改宗政策に対する見解は一致していなかった。彼らの中にはセルビア民族に対し、大量虐殺の続行を主張する者が依然として存在した。

強制改宗が精力的に展開されたのは、41 年の 9 月のみで、政府は 42 年の 2 月までに取りやめることとなった。M・ビオンディチによれば、1941 年から 42 年にかけて生じた改宗者は 9 万 7447 人から 9 万 9333 人の間で、加えて 1500 人がルター派教会に改宗し、ユーゴスラヴィア史学及び長らく西洋史学において、しばしば引用されてきた 24 万という数字とは大きく異なることを指摘している[98)]。改宗政策を中止した理由としては、カトリック教会とウスタシャ政権の間に齟齬が生じたのに加え、情勢が遷るにつれて、その実施にいくつかの問題が起こり始めたことにあった。カトリック教会とウスタシャ当局双方が直面した問題であった。第一に、改宗者のために新たな教区を設置しなければならず、十分な司祭を派遣することができなくなったことが挙げられる。第二に、カトリックではなく、イスラム教に改宗したセルビア人やユダヤ人に対して、迫害行為が散見されたことである[99)]。また、1942 年初頭からパルチザンやチェトニクが台頭したことを踏まえても、強制改宗政策は国内の安定化にはつながらなかったと言える[100)]。

97）Rory Yeomans,“Eradicating“Undesired Elements”: National Regeneration and the Ustasha Regime’s Program to Purify the Nation, 1941-1945,” p.219.
98）Biondich,“Controversies surrounding the Catholic Church,” p.444.
99）Tomasevich, op. cit., p.539.
100）門間卓也、前掲論文、136 頁。

こうして、セルビア民族の宗教的包摂の試みは失敗した。ウスタシャは強制改宗を集中的に実施していた41年9月から、ナチ・ドイツに国内情勢に係る進言を受けており、新たな「同化」政策としてクロアチア正教会の設立を検討し始めていた。そして42年2月、パヴェリチはクロアチア会議においてクロアチア正教会の設立を公表し、同年4月の法令と6月の憲章の制定を以てクロアチア正教会が設立された[101)]。

しかし、正教会の設立も「セルビア人問題」の解決にはつながらなかった。というのも、政権成立直後から行われていた正教会聖職者への迫害によって、クロアチア正教会へ協力する者が限られており、そもそも、クロアチア正教会はセルビア正教会と断絶されていたため、セルビア正教徒にとって信頼に足るものとみなされなかったからである[102)]。

以上、強制改宗の展開を中心に見てきた。聖職者の中にはフランシスコ会修道士のユリチェヴやグラヴァシュ、その他従軍司祭のようにウスタシャ政権に協力する者もいたが、強制改宗はウスタシャが主導した政策であって、教会組織との直接的な連携は見られなかった。ステピナツをはじめとする教会側にとって、政府の改宗政策に同意できないのはもちろんのこと、その過程で残虐行為が行われていることを見過ごすことはできなかった。ただし強調しておきたいのは、強制改宗政策が原因で、教会側がウスタシャ政権から距離を取り始める契機になったものの、政権への対応には曖昧な箇所も見られ、公然と抗議したわけではなかったということである。教会支配層と聖職者には、オスマン帝国統治下の16世紀から17世紀そして大戦間期に失ったクロアチア人カトリック教徒を再び取り戻したいという思いがあり、その思いが曖昧な態度へと繋がり、一部の聖職者をウスタシャ主導の強制改宗政策への協力へと向かわせたと思われる。事実、41年12月にステピナツが教皇に宛てた手紙の中では、改宗者の到来を歓迎している。教会側の姿勢の背景にあるバチカンとの関係は検証すべき題材である。このことについては、第三章で確認したい。そして、本節

101）Tomasevich, *War and Revolution in Yugoslavia,* pp.544-546.
102）門間卓也、前掲論文、137頁。

で確認されたのが、宗教を政治化するウスタシャ政権の姿勢である。改宗儀式における国家表象は世俗化された宗教の姿を如実に物語っていた。ウスタシャ運動が展開した強制改宗政策によって、各聖職者たちの態度が一層分かれていったと考えられる。一方、急進的諸政策は大衆層の幻滅を招き、戦時末期になるにしたがって、ウスタシャ運動は縮小していった。続く第三節では、戦時末期のカトリック教会及び聖職者の動向を取り上げたい。

2.3　戦時末期の聖職者

本節では、まず国家機構に参画した聖職者の戦時末期の動向を確認した上で、ステピナツを中心とする教会側の姿勢を確認したい。

多くのウスタシャ運動のイデオローグは当初から、クロアチア国家及び民族は「西方」に属しており、「東西」の狭間に位置するクロアチアは、西欧の精神的及び政治的枠内で発展したと謳ってきた。そして、そのプロパガンダはパルチザン勢力の侵攻に伴い、再び登場することになる[103)]。カトリック聖職者でウスタシャ当局の教育省の役人でもあったイヴォ・グベリナはそうしたプロパガンダを展開していった。彼は、1943 年の『フルヴァツカ・スモトラ』の記事において「ウスタシャ精神とカトリシズム」と題し、ウスタシャ・イデオロギーとカトリシズムは、この上ない調和状態にあるとした上で以下の様に主張している。⑴ウスタシャ国家の崩壊は、必然的に南東欧におけるカトリシズムの崩壊を意味する。⑵戦間期のユーゴスラヴィアの復活及びチトーの新たなユーゴスラヴィアは教会の迫害につながり、パルチザンの勝利はウスタシャ国家の利益を犯すだけでなく、カトリシズムの脅威となる故に破壊され続ける[104)]。グベリナは以上のように主張することで、バチカンとカトリック教会はウスタシャ国家を支援すべきだと主張した。クロアチア独立国の生き残りをかけた闘争の中、彼はウスタシャ運動に献身することを心に決めていた。同年彼は、「ポグラヴニクとウスタシャを信じることで、我々は未来と幸福を確信

103）同上論文、169 頁。
104）Kljaić, “Apostles, Saints’ Days, and Mass Mobilization,” pp. 159-161.

することができる」と述べている[105)]。

しかし、グベリナが国家の活力のために、バチカンと教会の動員を図ったとしても、大司教ステピナツは受け入れなかった。ステピナツは同年 6 月、政治に関与しているとしてグベリナに宗教上の務めを行使することを禁じ、聖職を解いた。他にも、教会組織として残虐行為に手を染め、あるいは暴力を誘発するような行為を取った聖職者については手段を講じている。本章 1 節で記したように強制収容所の長官を担ったフランシスコ会修道士のフィリポヴィチの行為を受けて、41 年 6 月にはザグレブのフランシスコ修道会は、誰一人としてウスタシャ当局の役人として仕えないことを決めた。他にも、多くの聖職者が教会側の介入によって、聖職者の役職を解かれている[106)]。以下では、教会側とウスタシャ政権との関係をステピナツに焦点を当てて見ていきたい。

ステピナツは建国当初よりパヴェリチに事態の改善を求め、改宗政策では教会組織として対応していた。しかし、依然として政権への公然たる抗議は見られなかった。ところが、42 年の春以降、ウスタシャ政府の人種主義に対する批判的な言説は着実に増えていく。例えば、ユダヤ人の移送が行われるという噂を聞きつけたステピナツは内務省のアンドリヤ・アルトゥコヴィチに手紙を送り、ユダヤ人に対する暴力を取りやめるよう進言している。さらに同年 10 月の説教では、以下の様に人種主義を否定している。

> あらゆる人、如何なる人種も神から生まれます。それらはみな、神の人種としてのみ存在するのです。カトリック教会は以上のような理由から、常に階級、人種そして民族理論の名の下で行われている、あらゆる不正や暴力を非難します[107)]。

ステピナツはまた、カトリックに介入したユダヤ人やカトリック教徒と結婚

---

105) Novak, *Magnum Crimen,* p.1210.
106) Kolstø, “The Croatian Catholic Church and the long road to Jasenovac,” p.40.
107) Biondich, “Controversies surrounding the Catholic Church,” p.447.

したユダヤ人に人種法を適用することにも反対した。さらに43年2月には、パヴェリチに宛てた手紙の中でヤセノヴァツ強制収容所を「クロアチア独立国の名誉についた恥ずべき汚点」と形容した[108]。そして同年10月31日の説教で、ステピナツはこれまで以上に明確に人種主義を否定した。ウスタシャ政権はこれを受けてステピナツを非難した。ユリイェ・マカネツ民族教育相は日刊紙『ノヴァ・フルヴァツカ』の中で、政府の人種主義的政策を擁護した上で、ステピナツへの暗に示された言及において「世俗的諸問題について知らなければ、感覚も持たず、加えてあらゆる政治的素質を持ち合わせていない者が、クロアチア国家の建設だけでなくカトリック教会をも守る戦士たちの間に政治的混乱と欠点を広めるべきではない」と非難した[109]。

ステピナツはまた、ウスタシャに協力している聖職者にも警告を発した。聖職者たちは教会の政策とは無関係に、自らの民族主義的・政治的信念のためにウスタシャ運動もしくは国家機構へと参画していた。聖職者の政権への協力は様々な形態をとり、時には、かなり残虐で不道徳的なかかわり方をしていた。そこで、42年2月、ステピナツはパヴェリチに、「たとえ聖職者がウスタシャ当局高官として政治活動に関与していたとしても、政治活動の禁止を支持するだろう」と伝えた。多くの聖職者がこの禁止を無視したことを受けて、ステピナツは、政党への参加を禁じた1926年の教皇による回勅、そして大司教による1935年と38年の教令を思い出せという趣旨の回状を発出した[110]。このステピナツによる働きかけは、聖職者に無視されたことで、クロアチア・カトリック教会が一枚岩的組織ではないことを示すことになった。

43年から44年はステピナツにとって政権との距離の取り方が非常に困難な時期だった。説教における私的な抗議は、政権に与える効果はなかったものの、日常化していった。ただし、先に見たようなウスタシャの人種主義や暴力に対して抗議することは、ウスタシャ政権への公然たる非難を意味しない。実

108) Ibid., pp.447-448.
109) Ibid., pp.449-450.
110) Biondich, “Controversies surrounding the Catholic Church,” pp.446-447.

際、ステピナツはウスタシャ政権との関係を断つことはなかった。

1941 年あるいは 42 年までには、既にウスタシャ政権は、誕生して間もない国家の存続を脅かす武装した共産主義者の反乱に直面していた。多くの聖職者が一方でウスタシャ・枢軸国、他方でユダヤ・ボリシェヴィキ独裁の二者択一を迫られたときに、大半は前者を選択した[111)]。カトリック聖職者が抱く共産主義の脅威は強調しておかなければならない。事実、ステピナツは戦前から共産主義をファシズム以上に恐れていた。1940 年 11 月に書かれた彼の日記には、「ソヴィエトが戦争で勝利することは、悪魔がこの世界と地獄の両方で権威を手にすることを意味し、長きに渡って残り続ける精神構造である」と綴られていた[112)]。そしてステピナツは戦争の終結が迫るわずか数週間前の 45 年 3 月 18 日の説教で、「全ての人々は自由になる資格があり、独立国家を持つ資格がある」と述べた[113)]。また、同月 24 日には、ウスタシャ政権の後押しを受けて司教会議が開催され、教会は教書を出した。その内容は国家への献身を力説しただけでなく、共産主義とユーゴスラヴィアのパルチザンを強く非難するものだった[114)]。

だがしかし、43 年に見られたステピナツによる人種政策に対する明確な批判と戦時末期の国家擁護とも受け取れる姿勢のかくも大きな隔たりは、如何にして説明できるのか。そしてまた、一部の聖職者たちが見せたウスタシャ政権への協力はナショナリズムと共産主義の脅威によってのみもたらされたものなのであろうか。J・トマセヴィチは一部の聖職者がウスタシャを支援したことを受けて、以下の様に記している。「ウスタシャ政権の政策に対するバチカンの姿勢と政治的・宗教的大変動期にクロアチアのカトリック教会に与えたバチカンの指導力について尋ねるのは至極妥当だと言える」[115)]。事実、クロアチア

111）Biondich, “Radical Catholicism and Fascism in Croatia,” p.396.
112）Biondich, “Controversies surrounding the Catholic Church,” p.450.
113）Ibid., p.451.
114）ただ、この司教会議に参加した司教は 12 人中 5 人のみで、残る 7 人の司教はパルチザンの占領地域にいたか、もしくは参加しないことを選んでいた。Tomasevich, *War and Revolution in Yugoslavia,* p.550.
115）*Ibid.,* p.531.

独立国とバチカンの間には非公式の外交関係が存在した。クロアチアのカトリック教会によるウスタシャ政権への対応を探るには、バチカンとクロアチア独立国及びクロアチア・カトリック教会の関係が問われなければならない。次章では、聖職者及びクロアチア・カトリック教会のウスタシャ政権への対応にバチカンの後ろ盾があったのかについて検討する。

第3章　バチカンとクロアチア独立国の関係

バチカンにとってクロアチアは歴史的に重要な意味を持ってきた。というのも、クロアチアはカトリック、正教そしてイスラム教が何世紀にもわたって共存と衝突を繰り返してきた土地だからである。オーストリア＝ハンガリー帝国の崩壊後、南東欧地域におけるカトリックの影響力は下がっていた。そして第二次大戦期、クロアチアの土地は新たな敵、共産主義との闘争の最前線と化す。そうしたことから、イタリアの傀儡国家でもあるクロアチア独立国は、バチカンが政治的・宗教的発展のために熱烈な関心を寄せる地域となっていく[116]。

そしてまた、クロアチア人にとってもバチカンは、自らのアイデンティティに欠かせない存在だった。クロアチア人がオスマン帝国との闘争で初めてトルコ人を他者として認識してから、自らのアイデンティティを規定する際の、最も古くかつ広範な枠組みはヨーロッパのキリスト教であった[117]。何より脆弱な統治体制であったクロアチア独立国は、自国を正当化するためにバチカンの後ろ盾を求めていた。本章では、残された課題であるバチカンを背景とした教会及び聖職者のウスタシャ政権への対応に迫った上で、再度、戦時末期のステピナツの動向に焦点を当てたい。

---

116) *Ibid.,* p.532.

117) Ivo Žanić, “The symbolic identity of Croatia in the triangle *Crossroads-Bulwark-Bridge*,” in Pål Kolstø, ed., *Myths and Boundaries in South-Eastern Europe,* London : Hurst & Company, 2005, pp.35-76.

クロアチア独立国が建国される前の 1939 年 11 月、ステピナツはローマへ赴いた。ピウス 12 世は、クロアチア人のフランシスコ会修道士の殉教者ニコラ・タヴェリチを列聖するために、ローマに来て国家巡礼を行った。彼はステピナツに対して、かつて教皇レオ 10 世[118]がクロアチア人を「キリスト教世界の防波堤」と称えたことに言及し、「より良い未来の希望は、あなたに微笑んでるでしょう…あなたの国で、教会と国家の関係は、両者に望ましく、調和のとれた行動で整えられるでしょう」と伝えた[119]。

しかし、教会と国家の関係は調和することなくユーゴ王国は崩壊し、クロアチア独立国が建国される。パヴェリチは当初よりバチカンと完全な外交関係を結ぶために教皇との会見を求めていた。ただ、バチカンには戦時中に建国された国家は認めず、中立を維持する決まりがあったため、教皇は繰り返し会見を拒否した。それでも同年 5 月 18 日、パヴェリチはローマで内謁する機会を得る。国家としての地位を保証してほしいというパヴェリチの願いは聞き入れられなかったものの、枢軸国と連合国は、この内謁によってクロアチア独立国が事実上の承認を得たと認識した[120]。

そして 7 月、バチカンの国務長官ルイジ・マリヨーネ[121]は大司教ステピナツ及びパヴェリチを始めとする多くの政府閣僚に教皇使節を派遣する旨を伝えた。8 月 3 日にはベネディクト修道院長ジョゼッペ・ラミーロ・マルコーネが教皇使節としてザグレブに到着した。これは政府に対してではなく、あくまで

---

118) 1519 年にレオ 10 世はオスマン帝国の進行に対してクロアチア人兵士が抵抗したことを称えて、「キリスト教世界の防波堤」と述べたとされるが、歴史的事実として疑わしい。門間卓也、前掲論文、76 頁。

119) John Cornwell, *Hitler's Pope : The Secret History of Pius XII,* London : Penguin Books, 2000, p.250.

120) Michele Frucht Levy, ""The Last Bullet for the Last Serb" : The Ustaša Genocide against Serbs : 1941-1945," *Nationalities Papers,* 37(6), 2009, p.815.

121) ルイジ・マリヨーネ国務長官（在任 1934-44）。バチカンの国務長官は外交と内政の所管も兼ねた実質上、教皇に次ぐ 2 番手とされているが、ピウス 12 世は国務次官であるドメニコ・タルディーニとジョバンニ・モンティーニの間でやりとりを密にし、政策を練った。44 年にマリヨーネが死去した後は、教皇自ら外交などの権限を振るっている。松本前掲書、14、102-103 頁。

クロアチア司教区の教皇使節としての派遣だった。ただ公式的な使節でなかったものの、ウスタシャは事実上の教皇大使（nuncio）として捉えた[122]。一方、クロアチア側もローマに非公式の使節を駐在させた。最初は、ニコラ・ルシノヴィチが担い、42 年 6 月からはエルヴィン・ロブコヴィツが担った。ところで、バチカンはロンドンに拠点を置くユーゴスラヴィア亡命政府とも戦時を通じて外交関係を維持していた[123]。つまるところ、バチカンはクロアチア独立国に戦時期を通じて正式な国家の承認を与えることなく、関係を維持することになる。

先述したように、ウスタシャ政権は成立直後から排外主義的政策に着手していた。バチカンは当初から迫害行為に関する情報を得ており、41 年 5 月半ばには、既に国務長官マリヨーネが「大司教ステピナツと他の司教たちは慎重に振る舞い、クロアチアの新しい指導者（パヴェリチ）と妥協することを避けている」と述べている。バチカンはまた、強制改宗政策にも関わっていた。東方典礼カトリック教会の枢機卿でバチカン会合の長官ウジェーヌ・ティサランは 41 年 7 月 17 日、ステピナツに手紙を送った。その内容は、最近正教に改宗し、以前まで東方典礼カトリック教徒だった人々に東方典礼カトリック教会の教区に参加する機会が与えられるべきだと進言するものだった。そして枢機卿の手紙は最後に以下の様に綴られていた。

> もし大司教であるあなたが、弟子であるクロアチアの司教たちにこの必須の規則を提供すれば、カトリック教徒でない人々の改宗のために、とても多くの希望が育まれるこの地にカトリシズムの前進的な拡大への貴重な貢献をしたとして、承認を受けるに値するでしょう[124]。

122）Tomasevich, op. cit., p.532. 一方バチカンは、クロアチア独立国に使節を派遣したことでイギリスとユーゴスラヴィア亡命政府の代表から抗議されている。John Pollard, *The Papacy in the Age of Totalitarianism, 1914-1958,* Oxford : Oxford University Press, 2014, p.347.

123）Tomasevich, op. cit., p.533.

124）*Ibid.,* p.535.

このようにバチカンは進言する形で改宗に関与していた。また、1941 年 12 月 3 日にステピナツが教皇に宛てた報告の中で、改宗に関して「この上ない展望が開けるように思われます」と記している様に、双方の改宗への思いは一致していたと思われる[125)]。さらに 43 年 5 月の教皇への報告では、これまでに 24 万人がカトリックに改宗したと伝えている[126)]。一方、バチカンはドイツとイタリアの情報源から 30 万人以上のセルビア人が殺害されているとの報告を受けとり始める。実際 42 年 3 月にティサランはルシノヴィチに対し、ボスニアとヘルツェゴヴィナのフランシスコ会修道士がセルビア民族の殺害に加担していることを受けて、やめるように進言しているが、何かその他に手段を講じるわけでもなく、単に外交的な警告に留まっていた。

42 年 4 月、ステピナツは二度目となるローマに訪問した。この時、彼はピウス 12 世とバチカンの役人と会い、国務長官マリヨーネに報告書を提出している。報告書の内容は、中絶の廃止、ポルノとフリーメイソン団への反対運動、共産主義との闘争を決心するような肯定的な内容が列挙されていた。実際、報告書はパヴェリチが満足してサインするほどの内容だったという[127)]。一方、ステピナツはパヴェリチの悪行について説明した 9 頁にわたる文書を提出したともされている。この訪問以後、ステピナツはウスタシャ政権に対する批判を強めていくことになる。M・フェイヤーの説明によれば、バチカンがウスタシャによる残虐行為を深刻に感じ、ステピナツにウスタシャを制御することを求めた結果だとしている。そしてこれは、教皇が直接非難することによって、不安定なクロアチア国家を危険にさらすよりも効果的な処置とされた[128)]。また、反ユダヤ主義・反セルビア主義的思想を持つサラエヴォ大司教シャリチの管轄下で、ユダヤ人の窮状について報告を受けた際、バチカンは教

---

125) *Ibid.,* p.539.

126) 第 2 章 2 節で確認したように、24 万という数字は 43 年 5 月にステピナツが教皇に宛てた報告に基づくものである。

127) Biondich, “Controversies surrounding the Catholic Church,” p.449.

128) Michael Phayer, *The Catholic Church and the Holocaust, 1930-1965,* Bloomington : Indiana University Press, 2000, p.38.

皇使節マルコーネに「状況に応じて、慎重に適切にふるまうように」と伝えただけで、ここでもマルコーネに対応を委ねていた。

以上のことから確認されるのは、バチカンがクロアチア独立国で残虐行為が横行していることを認識していた上で、クロアチア・カトリック教会の指導者であるステピナツと教皇使節マルコーネにウスタシャへの対応を委任していたということである。ところが、ステピナツが行使できる影響力には限りがあった。彼にはサラエヴォ大司教シャリチのようなウスタシャ運動を支援していた高位聖職者の聖職を停止する権限を欠いていた。そうした権限を有していたのは、実のところバチカンだけだったのである。

さて、教皇使節マルコーネはクロアチア独立国で如何にふるまっていたのか。彼はバチカンの国務長官マリヨーネと連絡を取り合い、さらにはステピナツとともに内務大臣アルトゥコヴィチに対してクロアチアのユダヤ人をアウシュヴィッツ強制収容所へ移送することに抗議していた[129)]。その一方で、当初からパヴェリチとも接触し、42 年 2 月以後はウスタシャ政府の公式式典に全回臨席している[130)]。以下ではマルコーネの行動に焦点を当て、聖職者及びウスタシャに与えた影響について確認していきたい。

マルコーネの姿勢はクロアチアの司教たちに向けた声明から垣間見ることができる。モスタル司教ミシッチの死後、42 年 10 月 4 日、新たな司教としてペータル・ジュールが任命された。就任式には教皇使節マルコーネとザグレブ大司教ステピナツ、サラエヴォ大司教シャリチを始めとする多くの高位聖職者そして「大十字軍」を含む組織の代表が列席していた[131)]。マルコーネはその場で演説している。彼はクロアチア人の敬虔さを称賛した上で、数世紀にわたって「東方」からの「野蛮な異教」に対する闘いを擁護してきた教皇に忠実であるよう説き勧めた。さらに、「クロアチア人はこの一時的な困難に打ち勝ち、ポグラヴニク（統領）アンテ・パヴェリチの指導の下、繁栄していくだろう」

129）*Ibid.,* p.85.
130）Tomasevich, *op. cit.,* p.532.
131）Novak, *Magnum Crimen,* pp.1204-1207.

と公言したのである[132]。この教皇使節の演説は、一部の司教並びに聖職者たちのウスタシャ政権への支援に一定程度の拍車をかけたのではないだろうか。

1943 年にマルコーネがサラエヴォでウスタシャ政府高官に訪問した後、ヘルツェゴヴィナへ向かう途中、モスタルに暫く滞在した。そこで彼は、ウスタシャの役人そしてイタリアのファシストと協議することになる。当時はパルチザンとの闘争の只中で、彼はその行く末に関心を寄せていた。協議の際に教皇とクロアチア人の関係について語った内容が、1943 年 5 月 20 日号のサラエヴォ大司教座発行のカトリック系週刊新聞『カトリチェキ・ティエドニク』に掲載された。

> 「…教皇は深い愛情を持って、この小さくも忠順であるクロアチアの人々の発展を推進しています。できる限り緊密な連携を築き、互いに支援し合いたいという願望に突き動かされ、教皇は人々の生活、心配事そして何を欲しているのかを知るために、クロアチアに使節を送り込んだのです。」（マルコーネの言説。以下記事。）マルコーネ使節は特別に我々の政府代表者と腰を据えて話し合い、彼らに教皇からの心からの祝福を送った。さらに教皇はクロアチアの人々が関心を持つありとあらゆることを学びたいと願っている。マルコーネ使節はクロアチア人が直面している状況そして生活に教皇が大いに関心を持っていることを強調した[133]。

ここで引用した記事が、マルコーネが語った通りだとするならば、ウスタシャにとりバチカンのお墨付きが与えられた受け止めるのは無理もない。パルチザンとの抗争が激化していたことを考慮すれば、闘争へと向かうウスタシャの刺激になったと考えられる。

1943 年に入ると、枢軸国陣営の後退ぶりは決定的になっていた。ステピナツは、イタリアが降伏する直前の同年 8 月中旬には、ドイツとクロアチア独立

132）Dedijer, *The Yugoslav Auschwitz and the Vatican,* p.335.
133）*Ibid.,* pp.333-334.

国が戦争に負け、ユーゴスラヴィアが再建されることを予期していた[134]。このことはクロアチア独立国が「国家」としての正当性を徐々に失っていったことを意味した。そしてステピナツは政権との姿勢を硬化させていくにあたり、戦後構想の中で次なる選択肢を模索していたと思われる。事実、彼はイギリスからの密使と通じていた。ステピナツは密使に宛てた報告の中で、「司教たちが政権に対する姿勢で分かれており、それぞれ好き勝手している」と不満を吐露している[135]。そして何より、ステピナツの新たな姿勢はローマに駐在していた聖職者クルノスラヴ・ドラガノヴィチ[136]に伝えられた。

> もし、人々があなたに「ザグレブ大司教はこの国の状況についてどう思われているのですか？」と問われたら、臨時の共産主義政府かチェトニク政府かどちらか選択を迫られたら、彼は共産主義の政府を選択すると伝えてください。共産主義者は聖職者や知識人を殺害するでしょうが、チェトニクはベビーベッドに寝ているクロアチア人の赤ん坊でさえ生かしておかないでしょう[137]。

戦況が複雑に展開し、クロアチア・カトリック教会としての立場が揺らぐ中で、指導者であるステピナツは妥協の結果として戦後の国家像に共産主義のユーゴスラヴィアを想定していた。彼が最も恐れていたのは、セルビア民族主義的姿勢を持つチェトニクからの報復であった。

ステピナツは、ウスタシャ政権との関係を完全に断つことはなかった。先述したように、クロアチア・カトリック教会は 45 年 3 月 25 日、司教会議で教書を発出し、クロアチア独立国並びにウスタシャに対して公式的に支援を表明した。一方、バチカンはそれに先立つ同月 7 日、国際的承認を受けていたユーゴ

134）Tomasevich, *op. cit.,* p.557.

135）Jacques Kornberg, *The Pope's Dilemma : Pius XII Faces Atrocities and Genocide in the Second World War,* Toronto : University of Toronto Press, 2015, p.94.

136）第 2 章脚注 79 参照。

137）Tomasevich, op. cit., pp.557-558.

スラヴィア民主連邦政府を国家として認めていた。クロアチア独立国が崩壊するのは45年5月のことである。

以上、バチカンを背景とした教会側及び聖職者の動向について考察した上で、戦時末期のステピナツの姿勢を見てきた。まず改宗に関しては、教会側に注文を付ける形で関与するバチカンの姿があった。加えて、教皇使節マルコーネの活動は聖職者間の分裂を一層加速させていったと言える。彼の演説に見られるように、教皇のお墨付きが得られたと認識した聖職者は、程度の差こそあれウスタシャによる統治を妥当と判断した。

そして強調しておきたいのは、バチカンがウスタシャ政権に対して公然と非難する姿勢が見られなかったことである。教皇及び国務長官は教皇使節マルコーネとステピナツに対応を委任する形をとっていた。一方、このことはステピナツ自身にも当てはまった。教会支配層である司教たちが政権に対する姿勢で分裂している状況で、ウスタシャ政権と断絶するという選択肢は、彼にとり教会組織としての破滅を意味したのではないだろうか。このことは、戦後構想を追う限りにおいて、ステピナツ個人としてはクロアチア独立国に一定程度見切りをつけながらも、政権との関係を最後まで維持し続けた結果から推察される。

しかし、ウスタシャ政権に抗議しながらも関係を維持したこの「曖昧さ」は、以上で明らかになったわけではない。バチカンとステピナツの両者がどれだけウスタシャ政権下の被害の実態を把握していたのか、ステピナツとピウス12世の間で何が交わされたのかについては定かではない。もし仮に、ステピナツのローマへの訪問の際、ピウス12世から指示を受けていたのであれば、それは彼の政権に対する態度を大きく左右させたことだろう。

おわりに

これまで、クロアチア・ナショナリズムの出現からクロアチア独立国崩壊に至るまでのカトリック聖職者を取り巻く歴史的環境を辿り、ウスタシャ運動へ

の彼らの支援を「主体性」に着目して分析してきた。以下では、明らかになった点を提示したい。

まず、クロアチア・カトリック教会が一貫して一枚岩ではなかったことである。ユーゴ王国の統治体制下で醸成されたナショナリズムは、一部の教会勢力をウスタシャと結びつけたものの、教会側が全面的に同調したわけではなかった。ウスタシャ政権が成立すると、聖職者間の分断は一層進み、ウスタシャ運動に対する各々の「主体性」が発揮された。イヴォ・グベリナやイヴァン・シャリチらは自らの主義に基づいてウスタシャ運動に参与した。

一方、教会側はウスタシャ政権が主導する排外主義的政策から距離を置いたが、体制が瓦解するまで共生し続けた。ステピナツに焦点を当てれば、政権への姿勢には 3 つの段階があったといえる。第 1 に「政権」と虐殺に直接加担する「ウスタシャ成員」を分けて考えていた段階である。このことは、ステピナツがパヴェリチに成員を戒めるよう要請していたことから判断される。第 2 に 42 年前後の強制改宗に対し、教会組織として対策に乗り出す段階である。この時期においては、国家主導で行われていることが教会組織に明確に認識された。しかし、依然として曖昧な態度が見られた。そして第 3 に人種政策に強く抗議する 43 年以後の段階である。この時期には、クロアチア独立国が「国家」としての体裁を徐々に失って行く過程で戦後構想を模索するが、教会組織が分裂している状態で公然と政権を非難することは危険であると考えたため、最後まで手を切ることはなかった。

そして、政権に関与する聖職者、曖昧な態度に終始した聖職者双方の背後にはバチカンの存在があったことを忘れてはならない。しかし、当の教皇ピウス 12 世もファシズムへの戦時中の曖昧な態度を指摘され、今日においても「黙認した」と非難されている。複雑に展開した国際情勢の只中で、ピウス 12 世とステピナツ、両者が抱えたジレンマをどのように考えたらよいのだろうか。2020 年 3 月 2 日、バチカンは長い間封印してきたピウス 12 世時代の文書を公開した[138)]。この文書は、バチカンを背景としたクロアチアのカトリック聖職

138)バチカンの文書公開は欧米各紙で取り上げられた。今後研究者による調査が進む↗

者が如何にウスタシャに関与したか、その実態に光を当てるかもしれない。今後の研究が待たれる。

今回「主体性」を問うにあたり踏み込みが一部にとどまったのが、ウスタシャが実践した宗教の政治利用である。国家の精神的一体化という目標には宗教の力が求められる。これは宗教と政治が相互依存の関係を築くが故に、聖職者の「主体性」が最も明白に表れるように思われる。宗教と政治を巡る「主体性」の検討は今後の課題にしたい。

参考文献表

（欧語文献）

Biondich, Mark. "Religion and Nation in Wartime Croatia : Reflections on the Ustaša Policy of Forced Religious Conversions", 1941-1942, *The Slavonic and East European Review,* 83(1), 2005, pp.71-116.

———. "Controversies surrounding the Catholic Church in Wartime Croatia, 1941-45", *Totalitarian Movements and Political Religions,* 7(4), 2006, pp.429-457.

———. "Radical Catholicism and Fascism in Croatia, 1918-1945," *Totalitarian Movements and Political Religions,* 8(2), 2007, pp.383-399.

———. "Faschistizing Catholicism in interwar Croatia," in Jan Neils, Anne Morelli and Danny Praet, eds., Catholicism and Fascism in Europe 1918-1945, Hildesheim, Zürich, New York : Olms, 2015.

Cipek, Tihomir. "The Croats and Yugoslavism," in Dejan Djokić, ed., *Yugoslavism : Histories of a Failed Idea 1918-1992,* London : Hurst & Company, 2003.

Cornwell, John. *Hitler's Pope : The Secret History of Pius XII,* London : Penguin Books, 2000.

Dedijer, Vladimir. (trans. Harvey L. Kendall), *The Yugoslav Auschwitz and the Vatican : The Croatian Massacre of the Serbs during World War II,* Buffalo : Prometheus Books, Freiburg : Ahriman-Verlag, 1992.

Dulić, Tomislav. "Rethinking violence : Motives and modes of mass murder in the independent state of Croatia, 1941-5" in Cathie Carmichael and Richard C. Maguire, eds., *The Routledge History of Genocide,* London : Routledge, 2015.

↘ 見通しである。BBC, "Vatican opens archives of Holocaust-era Pope Pius XII", March 2, 2020, URL : https : //www.bbc.com/news/world-europe-51703464 [accessed 2020-3-17]

Iordachi, Constantin. "Fascism in Southern Europe : A Comparison between Romania's Legion of the Archangel Michael and Croatia's Ustaša." in Roumen Daskalov and Diana Mishkova, eds., *Entangled Histories of the Balkans, Volume Two : Transfers of Political Ideologies and Institutions,* Leiden, Boston : Brill, 2014.

Kljaić, Stipe. "Apostles, Saints' Days, and Mass Mobilization," in Rory Yeomans, ed., *The Utopia of Terror : Life and Death in Wartime Croatia,* Rochester : University of Rochester Press, 2015.

Kornberg, Jacques. *The Pope's Dilemma : Pius XII Faces Atrocities and Genocide in the Second World War,* Toronto : University of Toronto Press, 2015.

Kolstø, Pål. "The Croatian Catholic Church and the long road to Jasenovac," *Nordic journal of Religion and Society,* 24(1), 2011, pp.37-56.

Levy, Michele Frucht. ""The Last Bullet for the Last Serb" : The Ustaša Genocide against Serbs : 1941-1945," *Nationalities Papers,* 37(6), 2009, pp.807-837.

Novak, Viktor. (trans. Ileana Ćosić, Milica Borlja ; ed., Vidosava Janković), *Magnum Crimen : half a century of clericalism in Croatia : dedicated to the known and unkown victims of clericalism,* Jagodina : Gambit, 2011.

Perica, Vjekoslav. *Balkan Idoles : Religion and Nationalism in Yugoslav States,* Oxford : Oxford University Press, 2002.

———. *Religion and Ethnic Nationalism : The Making of the "Church of the Croats"* (International conference : Novi Sad-Sremska Kamenica, 27.10. 2009), URL : https://chdr-ns.com/pdf/documents/srkamenica2009_vjekoslav_perica.pdf [accessed 2019-11-30]

Phayer, Michael. *The Catholic Church and the Holocaust, 1930-1965,* Bloomington : Indiana University Press, 2000.

Pollard, John. *The Papacy in the Age of Totalitarianism, 1914-1958,* Oxford : Oxford University Press, 2014.

Prlenda, Sandra. "Young, Religious, and Radical : The Croat Catholic Youth organizations, 1922-1945," in John R. Lampe and Mark Mazower, eds., *Ideologies and National Identities : The Case of Twentieth-Century Southeastern Europe,* Budapest, New York : Central European University Press, 2004.

Ramet, Sabrina P. *The Three Yugoslavias : State-Building and Legitimation, 1918-2005,* Washington, DC : Woodrow Wilson Center Press, 2006.

———. *The Independent State of Croatia 1941-45,* 1st ed., London : Routledge, 2015.

Tomasevich, Jozo. *War and Revolution in Yugoslavia, 1941-1945 : Occupation and Collaboration,* Stanford, California : Stanford University Press, 2001.

Yeomans, Rory. "Eradicating "Undesired Elements" : National Regeneration and the Ustasha Regime's Program to Purify the Nation, 1941-1945" in Anton Weiss-Wendt and Rory

Yeomans, eds., *Racial Science in Hitler's New Europe, 1938-1945,* Lincoln : University of Nebraska Press, 2013.

Žanić, Ivo. "The symbolic identity of Croatia in the triangle *Crossroads-Bulwark-Bridge*," in Pål Kolstø, ed., *Myths and Boundaries in South-Eastern Europe,* London : Hurst & Company, 2005.

（インターネット情報）

BBC, "Vatican opens archives of Holocaust-era Pope Pius XII", March 2, 2020, URL : https://www.bbc.com/news/world-europe-51703464［accessed 2020-3-17］

（邦語・翻訳文献）

石田信一『ダルマチアにおける国民統合過程の研究』刀水書房、2004 年。

———「旧ユーゴスラヴィア諸国と第二次世界大戦をめぐる歴史認識」『地域研究』12 号、2012 年。

ロバート・D・カプラン（宮島直機・門田美鈴訳）『バルカンの亡霊たち』NTT 出版、1996 年。

佐原徹哉『ボスニア内戦：グローバリゼーションとカオスの民族化』有志舎、2008 年。

清水明子「「クロアチア独立国」におけるセルビア人虐殺（一九四一～四二年）」松村高夫・矢野久編著『大量虐殺の社会史－戦慄の 20 世紀』ミネルヴァ書房、2007 年。

長島大輔,「国家と宗教－ユーゴスラヴィアの例（1918-1991）」、『北海道スラブ研究センター公開講座』、2007 年。URL : https://src-h.slav.hokudai.ac.jp/kokai/2007/nagashima.pdf【閲覧確認日：2019 年 11 月 9 日】。

松本佐保『バチカン近現代史』中公新書、2013 年。

門間卓也,「ウスタシャ運動と「知識人」のナショナリズム－クロアチア独立国の民族統治を巡る「主体性」－」、博士論文, 東京大学大学院、2019 年。

ジョセフ・ロスチャイルド（大津留厚監訳）『大戦間期の東欧－民族国家の幻影－』刀水書房、1994 年。

山川卓『マイノリティ保護のクロアチア政治史』晃洋書房、2019 年。

“Collaboration” of Catholic Clergies with the *Ustaša* Movement in the Independent State of Croatia

Rei KUGA

This graduation thesis (2019) addresses Croat Catholic clergies in the Independent State of Croatia (*Nezavisna Država Hrvatska,* NDH), which was established as a Nazi-puppet state. The author aims at clarifying how and why they were involved with *Ustaša,* a Croatian fascist-revolutionary organization, that seized power in NDH from 1941 to 1945. In conclusion, he tries to point out that the motive of their “subjective” collaboration with *Ustaša* was their nationalist ambition and that they were not totally integrated with the *Ustaša* Movement with the existence of Vatican as a backdrop.